



株式会社 ジーエス・ユアサ コーポレーション

CSRへの取り組み 2019

WEB版



目次

CSR の推進

トップメッセージ	02
CSR 方針・行動規範	04
CSR 推進体制	09
マテリアリティ	12

CSR 活動の紹介

公正、透明かつ健全な事業活動の推進と腐敗の防止	18
人権の尊重	25
適正な労働環境の維持、向上	29
安全、安心な製品、サービスの提供	41
地球環境の保全	48
地域社会との共生	71
サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進	78
CSR 調達／グリーン調達	84
社外からの評価	87
GRI 対照表	90

編集方針

CSR コンテンツ編集方針	99
---------------	----

GSユアサグループは、CSRに対する考え方やその取り組み状況をGSユアサのWEBサイトにて毎年公表しています。
本PDFファイルは、当社Webサイト「CSRへの取り組み」コンテンツで2019年度に開示した情報を参照いただけるように作成したものです。

トップメッセージ

Top Message

トップメッセージ

事業と社会のサステナブルグロースを実現していきます



昨今、持続可能な社会を実現するための国際社会でのさまざまな提言およびこれに呼応した官民の活動が活発化しています。このような状況の下、人々の安定した生活や経済活動および地球環境の維持に不可欠なエネルギー技術への期待や、世界が抱えるエネルギー問題を解決する救い手として、電池にはかつてないほどの期待が集まっています。私は、当社の製品・サービスとリソースがこれらの社会課題の解決に大きく貢献できるものと考えています。

2018年4月、私は当社グループの企業理念と価値観を同じくする「国連グローバル・コンパクト(UNGC)」に署名しました。当社は、UNGCが企業に求める4分野10原則に基づく活動を深化していくとともに、将来の市場ニーズともいえるSDGsにも自らの得意分野で貢献すべく活動を強化しています。具体的には、2019年度からスタートする第五次中期経営計画に当社事業と密接に関わるCSR重要課題(マテリアリティ)への対応計画を新たに組み込み、事業戦略と一体化したビジネスプロセスにより当社と社会が共有できる成果(アウトカム)を創出すべく活動を開始しました。これを実現するために、ステークホルダーの皆様と力を合わせたさまざまな取り組みに着手しています。

本中期経営計画のスタートに際し、当社グループは「新たな価値を創造し続けるエネルギー・デバイス・カンパニーへ」を長期ビジョンに決めました。日本で初めて鉛蓄電池の製造に成功し、世界初の量産電気自動車用リチウムイオンバッテリーを世に出した当社は、深海調査船、宇宙衛星、航空分野などの過酷な環境にも安定した性能を発揮しうる高い技術力を、次世代自動車分野、太陽光・風力発電などの再生可能エネルギー分野、インフラ分野にも応用し、ステークホルダーの皆様のご期待に応えてきました。今後とも、これら事業の拡大とともに経営の質を一層高め、電池を核とした新たな価値創造を通じて人々の幸福と持続可能な社会の実現に貢献することで、事業と社会のサステナブルグロース(持続可能な成長)を目指します。

代表取締役
取締役社長 村尾 修

■ 国連グローバル・コンパクトの10原則

<人権>

原則1： 人権擁護の支持と尊重

原則2： 人権侵害への非加担

<労働>

原則3： 結社の自由と団体交渉権の承認

原則4： 強制労働の排除

原則5： 児童労働の実効的な廃止

原則6： 雇用と職業の差別撤廃

<環境>

原則7： 環境問題の予防的アプローチ

原則8： 環境に対する責任のイニシアティブ

原則9： 環境にやさしい技術の開発と普及

<腐敗防止>

原則10： 強要や贈収賄を含むあらゆる形態の腐敗防止の
取り組み

WE SUPPORT



CSR方針・行動規範

CSR Policy & Code of Conduct

CSR方針・行動規範

2017年5月に社長方針として制定したCSR方針・行動規範は当社グループのCSR活動の基礎となっています。当社グループは社会および事業の持続的発展を図るために、CSR活動が事業活動そのものであることを全従業員が認識し、CSR方針・行動規範に基づいた行動を全員参加で取り組むことを推進しています。

CSR方針

GS YUASAは、法令遵守にとどまらず、社会的責任に関わる国際的行動規範を尊重し、蓄エネルギー技術等により事業活動の持続的発展に取り組むとともに、人と社会と地球環境に貢献します。

1. 公正、透明かつ健全な事業活動の推進と腐敗の防止

GS YUASAは、お客様、お取引先様、株主、地域社会の皆様の信頼の獲得を第一に考え、かつ各国、各地域の関係法令、ルールを遵守し、透明な事業活動を行います。また、あらゆる形態の腐敗防止に取り組み、違法な政治献金、公務員に対する贈賄は行わず、反社会的勢力である個人および団体とは一切の関係を持ちません。

2. 人権の尊重

GS YUASAは、強制労働、児童労働の排除はもとより、すべての人の人権および労働者としての基本的権利を尊重します。また、あらゆる差別を禁止し、多様性を尊重します。

3. 適正な労働環境の維持、向上

GS YUASAは、従業員にとって安全で働きやすい労働環境を提供し、適正なマネジメントにより中長期的に人材育成を進めます。

4. 安全、安心な製品、サービスを提供する責任の遂行

GS YUASAは、ものづくりを通じて、製品およびサービスがその役割を終えるまで安全と品質を確保します。また、製品およびサービスに関する安全情報を誠実に提供します。

5. 地球環境の保全

GS YUASAは、汚染の予防、気候変動への対応、持続可能な資源の利用を含む循環型社会の形成に取り組みます。

6. 地域社会との共生

GS YUASAは、地域社会と連携し共生することにより、地域の健全かつ持続的な発展に寄与します。

7. サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進

GS YUASAは、サプライチェーン全体にわたって、社会的責任を果たす企業活動を推進します。

制定：2017年5月1日

株式会社 ジーエス・ユアサ コーポレーション
代表取締役

取締役社長 村尾 修

CSR行動規範

1. 公正、透明かつ健全な事業活動の推進と腐敗の防止

1-1. 法令の遵守

- ① 私たちは、国際ルール、社会ルールを尊重し、事業活動を行う国、地域の法令遵守を徹底します。
- ② 私たちは、国際社会の一員として、国際的な平和と安全を維持するため、各国の輸出管理法令を遵守し、大量破壊兵器の拡散および通常兵器の過度の蓄積がされるような輸出取引を行いません。

1-2. 公私混同の排除

私たちは、個人的な目的で会社の資産や経費を使い、または職権を利用して個人的な利益を図る等、会社の利益を毀損する行為を行いません。

1-3. 公正、透明、自由な競争、取引

- ① 私たちは、同業他社との会合や業界団体の活動を通じて、製品およびサービスの価格、数量、販売地域等の申し合わせ(カルテル)を行いません。他社がそのような行為を提案した場合は、それに合意したと誤解されないよう明確に拒絶します。また、他の入札者との間で、落札者や落札価格の取り決め等、いわゆる談合を行いません。
- ② 私たちは、たとえ同意がある場合でも、下請事業者に責任がないにも関わらず、発注後に減額や支払を遅延させる、または下請事業者に不当な利益提供をさせる等、優越的な地位を濫用する行為は行いません。また、下請事業者に対する発注は、必ず必要事項を記載した書面または電磁的記録で行い、当該書面等を保管します。
- ③ 私たちは、他社の営業秘密を不正な方法で入手、利用しません。
- ④ 私たちは、製品およびサービスに関し、虚偽の表示や顧客に誤解を生じさせる表示は行いません。

1-4. 機密情報の管理の徹底

- ① 私たちは、機密情報を適切に管理し、第三者に開示の際は、機密保持契約を締結した上で開示します。
- ② 私たちは、お取引先様、共同研究者から機密情報として開示を受けた情報は適切に管理し、開示者の許可なく第三者に開示漏洩しません。
- ③ 私たちは、個人情報を収集する場合、利用目的を明確にし、適切な方法で実施します。また、個人情報の利用の際は、利用目的を特定します。
- ④ 私たちは、個人情報データを安全管理し、当該データを扱う従業員、委託先を適切にモニタリングします。

- ⑤ 私たちは、常に一人ひとりのプライバシーを尊重し、業務上、立場上知り得た個人の機密情報は細心の注意をもって取り扱い、それをみだりに漏洩しません。
- ⑥ 私たちは、職務上取得したグループ内およびお取引先様に関する内部情報に基づき、その公表前に当該株式または証券等の取引に関与する、いわゆるインサイダー取引を一切行いません。

1-5. 知的財産の尊重

- ① 私たちは、製品およびサービスの開発、生産、販売、提供等を行う場合は、特許、意匠、商標等に関する第三者の権利の事前調査を十分に行います。
- ② 私たちは、第三者の知的財産を使用する場合、正当な理由のある場合を除き、権利者の同意を得るものとし、第三者の知的財産を無断で使用しません。
- ③ 私たちは、ソフトウェアおよびその他の著作物（本、記事、絵、音楽、その他）の違法な複製をしません。

1-6. 反社会的勢力との関係の遮断

- ① 私たちは、株主の権利行使に関連して、いかなる形の財産上の利益も供与しません。
- ② 私たちは、反社会的勢力である個人および団体との取引関係、その他いかなる関係も持ちません。

1-7. 透明性のある情報開示

私たちは、事業活動を行う国、地域の法令で開示が必要とされている情報、およびその他のステークホルダーや社会との良きコミュニケーションを保つための情報を適時適切に開示します。

1-8. 政治献金規制の遵守

私たちは、商取引の獲得または維持、非公開情報の入手等、業務上何らかの見返りを求める政治献金を行いません。また、政治献金を行う際は、事業活動を行う国、地域の法令に定められた条件を遵守します。

1-9. 公務員への接待、贈答の禁止

私たちは、利害関係のある公務員およびそれに準ずるものに対し、金銭の提供、接待、贈答、その他の利益、および便宜の供与を一切行いません。

1-10. お取引先様との健全な関係

私たちは、お取引先様との健全な取引関係に努め、お取引先様から社会通念を超える金銭、財物または接待を受けません。

2. 人権の尊重

2-1. 差別の禁止と多様性の尊重

私たちは、多様性を尊重し、人種、性別、性的マイノリティ、国籍、出身国、障がい、宗教もしくは政治的見解等の理由を問わず、あらゆる差別を行いません。

2-2. 人格の尊重

私たちは、セクシャルハラスメント、パワーハラスメントを含む、あらゆる人格を否定する行為および他人の尊厳を傷つける行為を一切行いません。

2-3. 労働者の権利の尊重

私たちは、事業活動を行う国、地域の法令に基づき、結社の自由、団体交渉権等の権利を尊重します。

2-4. 強制労働、児童労働の禁止

私たちは、強制労働を行わず、法定就業年齢に満たない児童を労働させません。また、いかなる形であれ強制労働、児童労働に加担しません。

2-5. 人権侵害への加担の回避

私たちは、間接的であっても人権侵害に加担しません。

3. 適正な労働環境の維持、向上

3-1. 安全かつ衛生的な労働環境の維持、向上

私たちは、労働環境の安全および衛生に関し、事業活動を行う国、地域の法令や社内規程を遵守するとともに、それらの維持、向上に取り組みます。

3-2. 適正な労働時間の維持と最低賃金の確保および不当な賃金の減額禁止

- ① 私たちは、労働時間を適正に管理するとともに、過重労働による心身の健康障害の発生防止に努めます。
- ② 私たちは、事業活動を行う国、地域の法令に基づく最低賃金以上を支払い、不当な賃金の減額を行いません。

3-3. 中長期的な人材育成と適切な評価

私たちは、従業員の適性や能力等に応じたキャリア開発支援を積極的に行い、業務の成果に応じた適切な評価を行います。

3-4. 多様な働き方の尊重

私たちは、多様な働き方を尊重し、ワークライフバランスと心身の健康の確保に努めます。

3-5. 均等な労働機会の提供

私たちは、採用、昇進に関して均等な機会を提供し、恣意的または差別的な処分を行いません。

4. 安全、安心な製品、サービスを提供する責任の遂行

4-1. 安全性と品質の重視

私たちは、安全性と品質を重視し、最優先に取り組みます。そのために研究、開発、設計、調達、生産、販売、アフターサービス等の事業活動のすべてにおいて、安全な製品およびサービスの提供とお客さまに満足頂ける品質の維持、向上に努めます。

4-2. 安全情報の提供

私たちは、製品およびサービスに関する安全情報を明確にします。安全情報は、製品添付の説明書、製品への表示、ホームページ等の活用でお客さまおよび製品やサービスに関わる人々に安全情報を提供します。

4-3. 製品事故発生時の対応

私たちは、製品およびサービスで事故が発生した場合、迅速に対応するとともに、事故による被害の拡大防止を図ります。また、事実関係の調査、確認、原因究明、社内外への必要な報告、情報開示と再発防止を行います。

5. 地球環境の保全

5-1. 環境保護の推進

- ① 私たちは、事業活動、製品、サービスが環境に与える影響を確実に評価し、省エネルギー、温室効果ガスの削減、原材料や水の効率的利用、廃棄物の削減と再資源化を通じて汚染の予防を含む環境保護に努め、これらを継続的に改善して、環境パフォーマンスの向上を目指します。
- ② 私たちは、製品、サービスに関わるライフサイクルの各段階（原材料の取得、開発、設計、生産、輸送、使用、廃棄）の環境負荷の低減に取り組みます。
- ③ 私たちは、環境に関連する法令や対応する必要がある環境ニーズを満たすことはもとより、必要に応じて、自主管理基準による運用管理や環境汚染に繋がる事故の予防および発生時対応の事前準備を行って、環境リスク対策に取り組みます。

5-2. 環境配慮製品の提供

私たちは、環境ニーズに対応する製品およびサービスの提供を通じて、環境配慮型社会に貢献します。

6. 地域社会との共生

6-1. 地域社会の持続的発展への寄与

私たちは、企業もコミュニティの一員であることを認識し、企業の存立基盤である地域社会と連携して、ともに発展することを目指します。また、地域の文化や慣習を尊重します。

6-2. 地域人材の活用

私たちは、現地法人の事業活動にあたっては、地域の人材を積極的に登用し、当社の事業活動を通じて、地域社会の発展に貢献します。

7. サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進

7-1. CSR調達の推進

私たちは、サプライチェーン全体で社会的責任を果たすことを目的として、CSR調達ガイドラインをサプライヤーと共有し、相互協力の基にCSR調達の推進に努めます。

制定：2017年5月1日
株式会社 ジーエス・ユアサ コーポレーション
代表取締役
取締役社長 村尾 修

CSR推進体制

CSR Structure



企業理念の実現を目指すことが、持続可能な社会に貢献し、自らも長期的な事業活動を確保するCSR経営そのものであると考えています。

G S ユアサグループのCSR

当社グループは、企業理念である「革新と成長」を実践することが、当社グループのCSRの根幹となるものと捉えています。旧来の習慣に縛られずに、新技術の開発や業務プロセスの刷新などを通じて「革新」を生み出し、その結果として、収益の拡大だけでなく、人と社会と地球環境に貢献することで、ともに持続的な「成長」を目指す姿がCSRであると考えています。本業を通じてグローバルな社会課題やステークホルダーのニーズ・期待にタイムリーに対応することで、社会から長期的な信頼を得て、将来にわたって存在を期待され続ける企業となることを目指しています。

▶ [企業理念、関連方針について詳しくはこちらをご覧ください](#)

CSR推進体制

当社グループは、本業を通じたCSRへの取り組みを推進し、継続的な改善を図るために、組織的な体制を構築しています。国内外の関連会社を含むグループ全体のCSR活動を統括するために、当社取締役社長を「CSR推進最高責任者」とし、直属にCSR推進最高責任者が任命する「CSR担当役員」を置いています。また、グループ全体のCSR活動の協議、推進、立案を主導する「CSR委員会」は、CSR担当役員を委員長とし、事業部門やグループ会社などの責任者によるメンバーで構成されています。CSR方針を含む当社グループのCSR推進に係る重要事項については、CSR委員会での協議を経て、取締役会および経営会議にて決議されます。

■ CSR推進体制



CSR推進プロセス

当社グループは、CSR推進計画に基づいたプロセスを構築して、事業活動を通じたCSRへの取り組みを推進しています。本プロセスでは、当社グループの不変の価値観を示した企業理念を展開したしくみを構築することによって、企業価値とステークホルダー満足度を向上させることを目指しています。

企業理念の達成に向けては、さまざまな意思決定を行う判断基準として経営方針とCSR方針を策定しています。また、CSR方針に係る主要なテーマについては、CSRへの取り組みに対する具体的な方向性や行動基準を明確にしたCSR行動規範や個別の方針を策定しています。

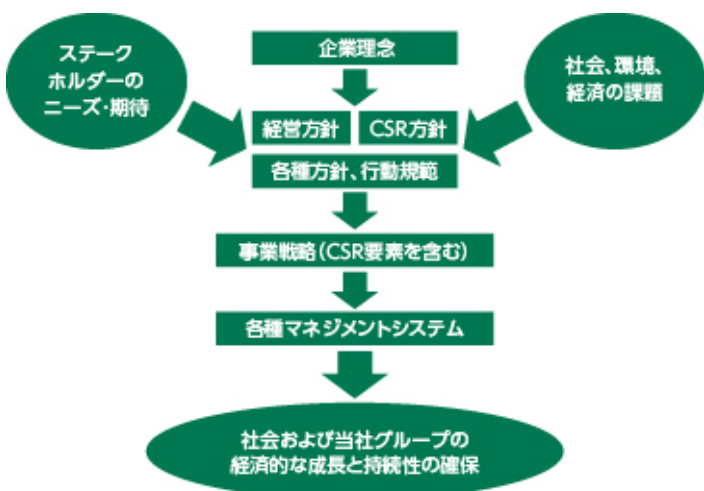
事業戦略プロセスでは、CSR方針の達成に向けた計画を組み込んでいます。ステークホルダーからの要請や期待および社会課題を考慮に入れた上で、社会および当社グループの経済的な成長と持続性を確保するための計画を策定しています。また、当該計画を達成するために、既存の事業プロセスで運用している各種マネジメントシステムを活用しています。運用プロセスにおけるパフォーマンスは、CSR担当役員を委員長とするCSR委員会で評価され、必要な見直しを行うことによって継続的な改善を図っています。

また、全社的なCSRを推進するために、当社グループのCSR方針を解説したマニュアル(CSRマニュアル)を全従業員に配布しています。CSRマニュアルは、従業員がCSR方針に関連する行動基準を認識するために、Q&Aやコラムを活用した主要テーマの解説、行動基準に適合した行動を実施しているかを自己評価するチェックリストなどで構成されています。海外グループ会社にはローカル社員が理解できる現地語(6言語)に翻訳したCSRマニュアルを配布し、国内外の全従業員がCSRの共通認識を共有することによって、当社グループのCSR推進の方向性を合わせ、事業活動を通じたCSRへの取り組みを目指しています。

■ CSR推進計画

フェーズ	計画期間	目標
第一段階	2016～2017年度	事業戦略（第四次中期経営計画）に関連したCSR課題に対応するプロセスを構築
第二段階	2018年度	プロセスを運用してパフォーマンスを分析・評価、プロセスの改善
第三段階	2019年度	CSR課題を事業戦略（第五次中期経営計画）に取り込んだビジネスプロセスの確立
第四段階	2019年度以降	CSRを事業活動の各プロセスに組み込み、社会と事業の持続的な発展を実現

■ CSR推進プロセスの概要



TOPICS

海外グループ会社におけるCSR推進活動

当社では、海外グループ会社におけるCSRへの取り組みを効果的に推進するために、CSRに関する教育を積極的に海外展開しています。

当社では、CSRに係る基礎的な用語や当社グループのCSR方針を分かりやすく解説したメールマガジン(以下、CSRメルマガ)を海外グループ会社に定期的に配信しています。各海外グループ会社では、ローカル社員が理解できる現地語(6言語)に翻訳されたCSRメルマガを活用して、CSRに関する教育を全従業員に実施しています。

なお、インドネシアに所在するPT. Yuasa Battery Indonesia (以下、YBID)やPT. Trimitra Baterai Prakasa (以下、TBP)では、従業員が各教育テーマについて対話形式で討議することで、CSRに対する認識を深める教育を実施しています。また、トルコに所在するInci GS Yuasa Aku Sanayi ve Ticaret Anonim Sirketi では、自社で制定した企業倫理規則についてもCSR教育の対象テーマとすることで、腐敗防止などに関するケーススタディを通じた企業倫理の浸透活動にも注力しています。

当社では、海外グループ会社を含む全従業員がCSRに対する当事者意識を持つ必要があると考えているため、今後もグループ全体におけるCSR教育を推進していきます。



CSR教育の実施風景(YBID)



CSR教育の実施風景(TBP)

マテリアリティ

Materiality

マテリアリティ（重要なCSR課題）の事業戦略への組み込み

当社グループは、事業戦略にCSR課題を反映させるために、事業への影響度と事業活動が社会に与える影響度を分析・評価した上で、取り組む必要があるマテリアリティを明確にしています。特定したマテリアリティについては、事業戦略に係る目標を設定し、その目標を達成するための具体的な活動計画や目標の達成状況を図る経営指標(KPI)を策定しています。

なお、マテリアリティは、当社グループのCSR委員会で変化するステークホルダーのニーズ・期待や社会課題を考慮した上で定期的に見直しています。また、マテリアリティを事業戦略に組み込む際には、事業基盤の強化や企業価値の向上などの観点を考慮した上で、ステークホルダー満足度の向上に繋がる計画をCSR委員会で策定しています。

当社グループは、マテリアリティを中期経営計画に組み込んだビジネスプロセスを運用することにより、財務・非財務の両面で経営の質を向上させ、事業と社会の持続可能な成長を目指しています。

■ 第5次中期経営計画における持続可能な成長に対するCSR課題の概要

分類	テーマ	持続可能な成長に対するCSR課題	主な計画内容や目標
E	持続可能な地球環境への貢献	<ul style="list-style-type: none"> 環境配慮製品の開発とグローバルでの販売 事業活動で生じる環境負荷の低減 	<ol style="list-style-type: none"> CO₂排出量を2018年度比6%以上削減 水使用量を2018年度比8%以上削減 環境配慮製品の売上比率を2021年度までに35%以上
S	人権の尊重と社会への貢献	<ul style="list-style-type: none"> 人権の尊重 人材育成による生産性とモチベーションの向上 労働環境および労働安全衛生の向上 消費者が安心する製品と情報の提供 CSR調達による社会課題の貢献と調達リスクの低減 	<ol style="list-style-type: none"> 人権教育および人権リスクマネジメントの強化 自律型人材育成および多様な人材活用基盤の確立 ワークライフバランス向上施策の推進 品質向上活動の遂行
G	公正、透明、迅速なグループ全体のガバナンスの推進	<ul style="list-style-type: none"> 各国の法令遵守および国際規範の尊重 知的財産の保護 機密情報管理の徹底 迅速かつ適切な意思決定 	<ol style="list-style-type: none"> コンプライアンス教育の推進および法令情報の整備 特許侵害予防活動の強化と模倣品の撲滅 コーポレートガバナンスコードを意識した経営

※持続可能な成長に対するCSR課題をESG (E：環境、S：社会、G：ガバナンス) に分類して掲載しています。

マテリアリティの特定プロセス

ステップ1：CSRのリスクおよび機会の抽出

中期経営計画の個々の重要課題に対して、当該課題の達成を阻害するCSRリスクや当該課題の達成を推進するCSR機会を抽出しています。CSRのリスクおよび機会を抽出する際には、CSRに関連する国際的なガイドラインを参考にしています。

ステップ2：重要なCSRのリスクおよび機会の特定

ステップ1で特定したCSRのリスクおよび機会の大きさを、事業への影響度(発生の可能性×事業影響の大きさ)を考慮したスコアリング評価により、事業上の重点課題となるリスクおよび機会を特定しています。

次に、事業上の重点課題となるリスクおよび機会に対して、当社グループの事業活動が社会に与える影響を、CSRテーマの関連数や社会的重要度から評価して、CSRの重点領域となるリスクおよび機会を特定しています。

■ CSRの重点領域マトリクス



ステップ3：マテリアリティの特定

ステップ2で特定した重要なCSRのリスクおよび機会を整理し、当該リスク・機会への対応方法を考慮した上で、マテリアリティを特定しています。また、必要に応じて、特定したマテリアリティの適切性を確保するために、外部の有識者とのダイアログを通じてステークホルダーの意見を取り入れています。

マテリアリティと対応計画

当社グループが特定したマテリアリティとその対応計画の概要を次表に示します。


本表に掲載したマテリアリティについては、測定可能な目標管理や管理基準に基づく運用管理などを実施して、継続的な改善や効果的な維持管理を図っていきます。なお、策定した計画内容については、変化する周囲の状況などに応じて、必要な見直しを行います。

また、当社グループは、2019年度を初年度とする3カ年の中期経営計画を展開する際に、当該計画における持続可能な成長に対するCSR課題を組み込んだ新たなマテリアリティ対応計画を策定しました。2018年度のマテリアリティ対応計画の総括やマテリアリティの見直しを行った上で2019年度以降のマテリアリティ対応計画を策定しています。

なお、本表は、ステークホルダーの皆様にご理解いただけるように、当社グループが特定したマテリアリティと世界共通言語と考えるSDGs[※]との関連性を確認した結果も併せて掲載しています。

※SDGs (Sustainable Development Goals)：国連が採択した持続可能な社会を構築するための目標であり、解決すべきグローバルな社会課題を明確に示しています

■ マテリアリティ対応計画の概要 (2019~2021年度)


マテリアリティ	活動概要	適用範囲	KPI	関連するSDGs
公正、透明かつ健全な事業活動の推進と腐敗の防止				
CSR・コンプライアンスの徹底	法令情報の周知とコンプライアンス研修の推進	国内	①コンプライアンス啓発情報の年間発行回数 ②コンプライアンス研修の実施テーマ数	
		海外	①国内コンプライアンス教育システムの海外展開計画の進捗率 ②法令違反リスク対応計画の進捗率	
知的財産の保護	第三者知的財産権の侵害回避の徹底	国内	開発段階での特許侵害調査の運用実施率	
	模倣品の摘発促進 (海外機関アクセスチャネルの拡大など)	海外	模倣品による知的財産権侵害対応計画の達成率	
機密情報管理の徹底	セキュリティ対策の推進と不正アクセス監視の強化	グローバル	高セキュリティレベル検知時のサイバー攻撃対応率	
		国内	大量データ出力時の情報流出確認対応率	
	情報セキュリティ教育の推進	国内	情報セキュリティ習熟度テストの合格率	
人権の尊重				
人格の尊重	コンプライアンス研修の推進、ホットライン通報制度の周知徹底	国内	人権教育計画の達成率	  
		海外	①国内ハラスメント教育システムの海外展開計画の達成率 ②ハラスメント通報制度の運用改善計画の進捗率	
	人権リスク管理の徹底	国内	人権リスク対応計画の進捗率	  

マテリアリティ	活動概要	適用範囲	KPI	関連するSDG _s
適正な労働環境の維持、保全				
多様性の尊重	女性の能力開発の促進	国内	①女性の能力開発を支援する研修の年間実施回数 ②総合職に採用した新卒者における女性割合	
人材開発の推進	人材育成プログラムの推進	国内	①従業員の成長を支援する教育計画の達成率 ②スキルマップを活用した職場教育計画の達成率	 
		海外	①海外拠点長に対する教育計画の達成率 ②キャリア開発支援ツールの海外展開計画の達成率	
労働環境・労働安全衛生の向上	従業員労働時間管理の徹底、長時間労働発生時の再発防止対応の推進	国内	①長時間労働発生時の再発防止対応率 ②労働時間に関する年間労使協議回数 ③有給休暇年間取得基準日数の運用達成率(10日/人以上)	
	労働安全衛生リスクマネジメントの推進	国内	①重大な労働災害の発生件数 ②休業度数率 ③作業員血中鉛濃度管理基準値の不適合者数 ④作業環境測定における作業管理区分Ⅲの対象数	 
		海外	①重大な労働災害の発生件数 ②休業度数率 ③作業員血中鉛管理の海外展開計画の達成率	

マテリアリティ	活動概要	適用範囲	KPI	関連するSDGs
安全、安心な製品、サービスを提供する責任の遂行				
高品質な製品の提供	品質改善や品質コミュニケーション強化の推進（品質マネジメントシステムの活用）	グローバル	クレーム発生や工程内不良に対する目標の達成率	 
	メンテナンスサービス体制の強化	国内	製品メンテナンスサービス体制システム運用計画の進捗率	 
	製品安全教育の推進	グローバル	重大な製品事故の発生件数	
地球環境の保全				
環境保護の推進	水資源の有効利用の推進	グローバル	水使用量の削減率(2018年度比)	 
	低炭素社会実現への貢献	グローバル	CO ₂ 排出量の削減率(2018年度比)	 
	環境汚染の予防 (環境リスク管理の徹底)	国内	重大な環境事故の発生件数	 
		海外	環境リスク対応計画の進捗率 (水質、大気質、地下浸透)	
	市場に提供する製品の再生材料使用率の向上	グローバル	全鉛蓄電池に使用される鉛原材料の再生鉛使用重量の比率	
環境配慮製品の開発と普及	環境配慮製品に搭載される当社製品の市場拡大（低公害車用途など）	グローバル	全製品の売上高に占める環境配慮製品の販売比率	
	環境性能を向上させる製品の開発	国内	リチウムイオン電池の寿命性能基準の適合率	 

マテリアリティ	活動概要	適用範囲	KPI	関連するSDGs
サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進				
CSR調達の推進	紛争鉱物調査への対応	国内	紛争鉱物調査計画の達成率	
	サプライヤーCSRリスクの管理	国内	サプライヤーCSR課題改善計画の達成率	  
		海外	サプライヤーCSR課題改善計画の達成率	 
	サプライチェーンにおける環境負荷の低減	国内	①サプライチェーンにおけるCO ₂ 排出量の削減率(前年度比) ②サプライチェーンにおける水使用量の削減率(前年度比)	   

※適用範囲は対象となるすべてのグループ会社を含まない場合があります

[マテリアリティ対応計画の詳細内容はこちらをご覧ください](#) 

公正、透明かつ健全な事業活動の推進と腐敗の防止

Developing Fair, Transparent, and Sound Business, and Anti-Corruption

持続的な成長や中長期的な企業価値向上のため、
コーポレート・ガバナンスの強化、充実に取り組んでいます。

コーポレート・ガバナンス

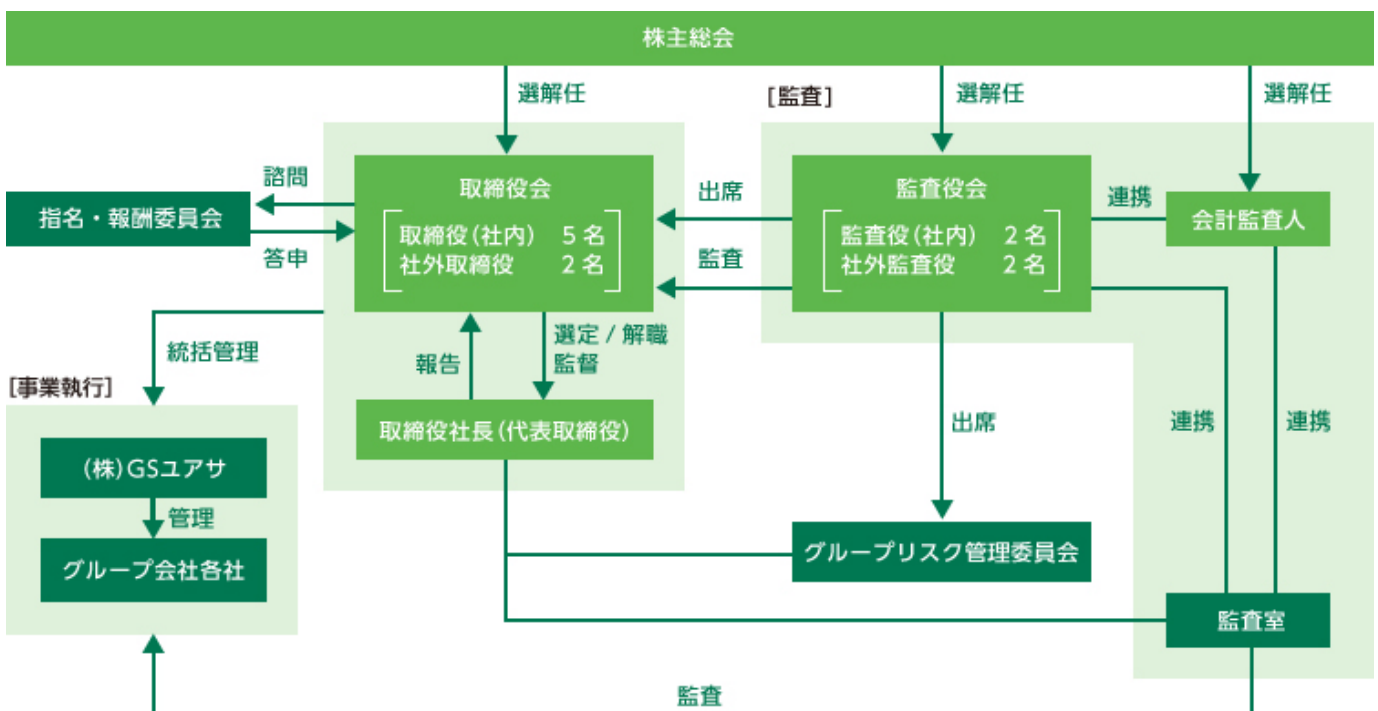
考え方および体制

当社グループは、持続的な成長や中長期的な企業価値向上を図るため、変化する経営環境に迅速かつ効率的に対応できる組織、体制を整備するとともに、コンプライアンス経営の徹底、強化を図り、経営の健全性、透明性の向上に真摯に取り組むことをコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方としています。

このような考え方に基づき、2017年度より、新たなガバナンス体制がスタートしています。純粋持株会社である当社は、グループ事業全体の経営戦略の策定と事業統括およびグループ事業の執行に対する監督の役割を担います。一方、中核事業会社である株式会社GSユアサは、当社グループにおける事業執行の中心としての役割を担い、業務執行機能を集約、強化し、事業に関する迅速な意思決定を行います。

当社取締役会においては、経営方針などに関する戦略的意思決定と監督機能に重点を置くことで、当社グループ経営に関する事項の迅速かつ効率的な意思決定を行っています。また、独立社外取締役を複数名選任することにより、モニタリングの強化を実現しています。

■ ガバナンス体制(2019年度)



取締役会の実効性評価

2016年度から毎年1回、取締役会の実効性評価を実施しています。各取締役や監査役に対し、取締役会の構成、運営、議題、および責務などについてアンケートを行い、その内容の分析・評価の結果、取締役会の実効性は確保されていると判断しています。

2018年度は、前年度に受けた指摘事項に対する改善策の効果測定を行い、概ね改善した旨を確認しました。ただし、重要な決議事項に関するフォローアップについては、報告頻度や報告内容に対してさらなる改善を指摘する意見があったため、これらの見直しを検討しました。

今後も取締役会の実効性評価を継続し、さらなる改善に努めていきます。

指名・報酬委員会の設置

2019年2月26日に開催した取締役会での決議により、取締役の指名および報酬などに係る取締役会の機能の独立性・客観性と説明責任を強化することを目的に、取締役会の諮問機関として独立社外取締役を委員長とする任意の指名・報酬委員会を設置しました。

指名委員会は、取締役候補者の選任案、代表取締役の選定案および後継者計画(育成計画を含む)などについて協議し、取締役会に答申する機能を有しています。また、報酬委員会は、取締役の報酬決定の方針や取締役の個人別報酬などについて協議し、取締役会に答申する機能を有しています。

■ 指名・報酬委員会の構成

区分	役職・地位	氏名
委員長	社外取締役	大谷 郁夫
委員	取締役社長	村尾 修
	取締役副社長	西田 啓
	社外取締役	松永 隆義

社内取締役の選定理由

純粋持株会社としてグループを統括するためにグループ全体の事業や機能をカバーできる知識、経験などを有し、かつ迅速な意思決定を行うために必要な適性、能力などを有した人材をバランスよく選定しています。なお、現在女性役員はいませんが、株式会社GSユアサにおいて女性新卒者の積極採用や次世代育成研修などの女性活躍推進策を推進し、女性管理職の割合も徐々に向上しています

※ 個々の社内取締役および社外取締役の選定理由については、こちらをご参照ください。



社外取締役の独立性に関する考え方

社外取締役候補者の選定にあたっては、会社法に定められた社外性の要件に該当すること、経営執行者からの制約を受けることなく、会社業務の執行の適法性・妥当性について株主の立場から客観的・中立的に判断できる経験と識見を備えていることを選定要素としています。また、外形的にも独立性を有している人材が望ましいと考え、東京証券取引所の定める独立性基準などを参考にしています。

社外役員の取締役会および監査役会への出席状況

2018年度の社外役員の取締役会および監査役会の出席状況については次表の通りです。

■ 社外役員の取締役会および監査役会への出席状況

社外役員	取締役会	監査役会
	出席回数/開催回数	出席回数/開催回数
取締役 大谷 郁夫	18 / 18	-
取締役 松永 隆義	13 / 13	-
監査役 落合 伸二	18 / 18	13 / 13
監査役 大原 克哉	18 / 18	13 / 13
監査役 藤井 司	18 / 18	13 / 13

役員報酬

2018年度に取締役および監査役に支払った報酬内容は次表の通りです。

■ 役員区分ごとの報酬などの総額および対象となる役員の員数

役員区分	報酬などの総額(百万円)	対象となる役員の員数
取締役（社外取締役を除く）	102	6
監査役（社外監査役を除く）	12	1
社外役員	54	6

内部統制システム

当社グループでは、経営基盤を強化するために、会社法に基づいた業務の適正を確保するための体制や、必要な規則を整備して、適切な経営情報の管理、リスク管理およびグループの監査などのしくみを運用しています。

また、金融商品取引法に基づく内部統制報告制度に対応するために、財務報告に係る内部統制の体制やしくみを構築・維持しています。海外の子会社を含めた連結グループ各社は、内部統制の整備および運用状況を社内評価し、社外の監査を受けた後に内部統制報告書を開示しています（詳細は、金融商品取引法に基づく有価証券報告書等の開示書類に関する電子開示システムEDINETをご参照ください）。

リスク管理

基本的な考え方

当社グループでは、企業が永続的に成長していくために、リスク管理は欠かすことができないものと考えています。リスクが顕在化することによって発生した危機事象が当社グループや一般社会に重大な影響を及ぼすことがないように、当社グループは基本的な考え方として次の2つが重要と考えています。

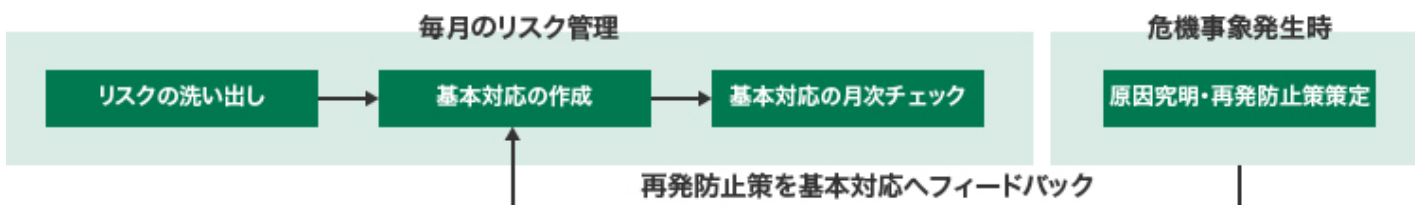
まず、リスクを予見、把握し、適切な事前措置を実施することによって、リスクの顕在化（危機事象の発生）の未然防止を行います。また、万が一、危機事象が発生した場合に損失を最小限に抑えられるように、あらかじめ有効な措置を講じておきます。当社グループでは、このような考え方を基本とした適切なリスク管理を推進する「リスク管理規則」を制定しており、従業員などの責務やリスク管理推進体制などを規定しています。

リスク管理シートによるリスクマネジメント

各部門では、リスク管理規則に従って、毎月「リスク管理シート」を用いたリスクマネジメントを実施しています。まず「基本対応」として、各部署が洗い出したリスクに対して、リスクを顕在化させ危機事象に至らせないための方策や危機事象発生時の損失最小化策をリスク管理シートに記入し、それを部署ごとに実施状況を毎月確認することとしています。また、万が一、危機事象が発生した場合には、危機事象の内容、対応の経緯、原因究明、再発防止策をリスク管理シートに記入しています。再発防止策については、「基本対応」にフィードバックした上で、その実施状況を毎月確認することにより、同様の危機事象が再発しないしくみとしています。

部署ごとに作成されたリスク管理シートは部門ごとに集約され、その部門を管掌する取締役が出席するリスク管理委員会でリスク対応状況の確認や評価を行います。委員会における議論の内容は、必要に応じて各部署へフィードバックされ、リスク管理の実効性を向上させるしくみとなっています。

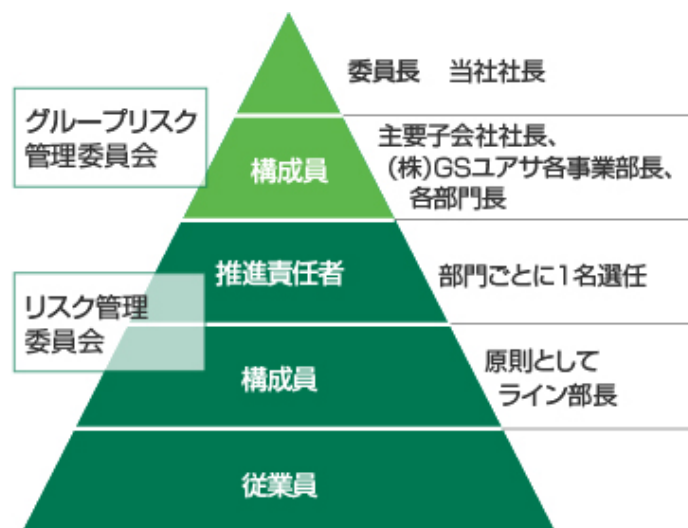
■ リスク管理シートの運用



グループリスク管理委員会によるリスクマネジメント

グループ全体のリスク管理の推進とリスク情報の共有化を図るために、半年に1度、当社取締役社長を委員長とし、各部門リスク管理委員長を構成員としたグループリスク管理委員会を開催しています。同委員会では、各部門リスク管理委員長によってリスク管理状況が報告され、各部門において適正なリスク管理が行われているかを点検するとともに、それぞれのリスク管理のあり方につき、積極的な意見交換と情報共有を行っています。

■ リスク管理体制



危機発生時の体制

リスクが顕在化する事態に備えて、経営危機事象を迅速に把握する緊急連絡網などの体制を整備しています。重大な危機事象が発生した場合には、会社損失の最小化を図るために、当社取締役社長を委員長とし、グループリスク管理委員会の中から選定された委員を構成員とする危機管理対策本部を設置して、迅速かつ十分な注意をもって適切な対応を実施する体制を整備しています。

法令等の遵守

コンプライアンス推進の基本的な考え方

当社は、企業理念である「革新と成長」を通じて人と社会と地球環境への貢献を実践するためには、全従業員が、法令、倫理、社則の遵守を重視した行動をとることが重要であると認識しています。

当社取締役社長が全従業員に発信している「コンプライアンス宣言」では、コンプライアンス先進企業となるために、法令違反や倫理に反した行為による成果を求めない旨をコミットメントし、「ルールやしぐみの整備」と「コンプライアンス実現に向けた強い意志」が必要不可欠であることを示しています。当社グループでは、当該指針のもと、多角的なコンプライアンス推進活動を全階層の従業員に展開し、コンプライアンス意識の向上を実効性のあるものにするために、各従業員がなすべきことを自律的に考えさせることを基本的な考え方としています。

コンプライアンス意識の浸透

当社グループでは、グループの一員として遵守すべきルールを明確にしたマニュアル(CSRマニュアル)を全従業員に配布して、コンプライアンス意識の社内浸透を図っています。

本マニュアルは、当社グループのCSR方針を解説したものであり、各従業員が業務を行う際にどのような行動をすべきかの基準を明確にしています。各従業員が行動基準に基づいた行動をとるためのツールとして活用するために、本マニュアルには次の事項を掲載しています。

- 具体的なコンプライアンス運用事例やコンプライアンスリスク顕在化事例(Q&A形式やコラムで解説)
- 行動基準を遵守しているかを自己診断するチェックリスト

また、本マニュアルにコンプライアンスリスクを容易に発見するしくみである内部通報制度の活用方法や危機事象発生時の緊急連絡体制を掲載することによって、コンプライアンス違反事案への早期対応の実現を図っています。

CSR職場ミーティング

コンプライアンス職場ミーティングは、コンプライアンス意識を従業員一人ひとりに浸透させることを目的に、2012年度からはじまり、2018年度まで7年連続で開催しています。

2018年度からは、CSR方針に関連する14テーマを取り上げた「CSR職場ミーティング」として実施し、株式会社GSユアサの全職場(331職場)だけでなく、国内グループ会社(22社)も適用範囲の対象にしています。テーマは、「CSRとは」「意図的な不正行為を防止するために」「機密情報の取り扱い」「下請法」「個人情報の保護」「安全保障貿易管理」「知的財産」「人権の尊重」「ハラスメント(セクシャル・パワーハラスメント)」「労働時間管理」「安全衛生」「製品安全」「廃棄物」「サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進」など多岐にわたっています。各テーマを管轄する部門が作成した教材を使用することで、当社グループの状況に応じた教育内容にしています。

2018年度に実施した本ミーティングでは、多くの職場で活発な意見交換が行われ、96%の職場が「有効だった」と評価しています。

本ミーティングは、今後も継続して開催し、常に最新かつ教育効果の高いテーマを採用していきます。

企業倫理ホットライン

当社グループは、「企業倫理ホットライン規程」を制定しており、従業員、派遣社員、サプライヤー様などが、当社グループの従業員などによる法令および社則の違反、その他の不正または不適切な行為、またはそのおそれがある事項を発見した場合に、匿名での通報が可能な「企業倫理ホットライン」を社内外に設置しています。2018年度はパワーハラスメントに関する事案を含む10件の通報がありました。情報提供者の保護を確保した上で、必要な調査を行い、適切な措置を講じています。

■ 企業倫理ホットラインへの通報件数

年度	件数
2014	3
2015	8
2016	5
2017	6
2018	10

反社会的勢力の排除

当社グループは、「反社会的勢力である個人および団体とは一切の関係を持たない」ことをCSR方針で明確にしています。また、CSR行動規範では、「反社会的勢力との関係の遮断」を掲げ、「株主の権利行使に関連して、いかなる形の財産上の利益を供与しないこと」「反社会的勢力である個人および団体との取引関係、その他いかなる関係も持たないこと」を具体的な指針として定め、これらの方針および行動規範を全従業員に周知しています。

情報セキュリティ

情報セキュリティへの取り組み

当社は、グローバルな情報セキュリティへの取り組みが重要であると考えています。外部セキュリティサービスによる通信状況の常時監視や不正アクセス検知システムの導入などを通して、社内ネットワークへの不正アクセスを防止し、被害を未然に防止することができるように取り組んでいます。また、機密情報の流出防止を図るために、社外持ち出しパソコンに対してデータを暗号化しています。さらに、従業員に対して、情報セキュリティハンドブックの配付やeラーニングによる教育などを通じて、「情報システム利用管理手順」を遵守する啓蒙活動を推進しています。海外グループ会社についても、国内のセキュリティ対策を基準にした対応状況の調査を行い、セキュリティが脆弱な箇所への対策を行うように指導しています。

知的財産

知的財産保護への取り組み

当社は、技術開発の成果である知的財産を重要な資産の一つとして捉えています。

毎年、国内では約200~300件、海外では約100~150件程度の特許を出願しています。積極的な特許出願を通じて、当社グループの優位性のある技術を守り、模倣品を排除することによって、お客様の信頼を守ることを基本としています。

2019年度からは、従前の知的財産保護活動に加えて、AIやIoTに関連した特許活動の推進や海外グループ会社における知的財産リスクの回避を目的とした活動にも注力し、当社グループの最先端およびグローバルな事業推進を知的財産分野から支援しています。また、海外で頻発する模倣品による被害に対しては、不正商品の摘発や訴訟などを通じて、お客様が安心して当社製品を購入できる活動に継続的に取り組んでいきます。

人権の尊重

Respect for Human Rights



当社グループは、企業理念である「人と社会と地球環境に貢献します」を実現するためには、すべての人の人権が尊重されることが不可欠だと考えています。

差別の禁止と多様性の尊重

公正な選考および機会の提供

当社グループでは、能力やパフォーマンスに基づく公正な選考、評価、育成を実施しています。従業員の採用、人事評価、その他の人事処遇などにおける差別を禁止し、人種、性別、性的マイノリティ、国籍、出身国、障がい、宗教、政治的見解を問わず、多様性を尊重しています。

労働者の権利の尊重

労使一体での「働きやすい環境づくり」

国内グループ会社では、働きやすい環境づくりを労使一体で推進しています。株式会社GSユアサでは、ユニオンショップ制を採用しており、原則として管理職以外のすべての正規従業員は労働組合に加入しています。また、従業員の労働条件や福利厚生をはじめ、国内グループ会社の経営施策に対する労働組合の提言や活発な議論により、相互理解を深めながら事業を進めています。労使が一体となって、企業運営の客観性や透明性を確保するとともに諸施策の実効性を高めています。

■ 労使協議体制（国内グループ会社）

労使協議体の名称	開催頻度	内容
経営協議会	年4回	会社の経営方針、経営状況、事業執行状況などに関する協議
部門委員会	月1回	研究開発部門および事業部門ごとの課題に関する協議
工場委員会	月1回	生産部門の課題に関する協議
安全衛生委員会（法定）	月1回	労働災害防止の取り組みに関する協議
労働時間専門委員会	月1回	労働時間の状況確認および改善に関する協議
次世代専門委員会	年2回	育児および介護支援制度に関する協議

強制労働、児童労働の禁止

強制労働や児童労働などに対する基本的なルール

当社グループは、日本国内はもちろんのこと、当社海外グループ会社においても、強制労働や児童労働などに対する下記の基本ルールを展開しています。また、サプライヤー様において強制労働や児童労働の事実が発覚した場合には、ただちに是正するしくみを構築しています。

強制労働、児童労働の禁止

私たちは、強制労働を行わず、法定就業年齢に満たない児童を労働させません。また、いかなる形であれ強制労働、児童労働に加担しません。

人権侵害への加担の回避

私たちは、間接的であっても人権侵害に加担しません。

現代奴隷や賃金格差に関する法令への対応

当社グループは、各国や各地域の法令・ルールを遵守し、事業の透明性を確保する活動の一つとして、2015年に施行された英国現代奴隷法や2017年に施行された男女間賃金格差情報規則に対応しています。

英国の海外グループ会社であるGS Yuasa Battery Europe Limited（以下、GYEUR）では、これらの法令に対するステートメントや取り組み状況などに関する情報を企業サイト上で開示しており、今後も定期的に当該情報を更新していきます。

▶ [当該情報の掲載内容についてはこちらをご覧ください（GYEURのサイトへリンクします\[英語\]](#)

TOPICS

海外グループ会社における人権課題への取り組み状況の把握

当社グループでは、事業活動がステークホルダーの人権に及ぼす負の影響を回避・緩和することを目的として、海外グループ会社の人権課題に対する取り組み状況を把握する活動を2017年度より実施しています。

当該活動では、当社グループのCSR推進メンバーが海外グループ会社の労働環境などを現地巡視して、事業活動を行う国・地域の法規制などの遵守状況の確認や人権に対する国際的な基準との比較などを行っています。

いくつかの海外グループ会社では、内部通報制度の運用などに課題がありました。今後は、巡視結果を分析・評価して、事業活動を行う国・地域の文化や習慣などを考慮した上で必要な対策を講じる予定です。

● 主な巡視項目

- 強制労働、児童労働、差別の有無
- 労働時間、賃金の管理
- 多様性の尊重(障がい者雇用、女性活躍推進など)
- 人道的待遇(ハラスメント、内部通報制度など)
- 結社の自由
- 労働安全衛生、健康管理
- 働きやすい職場環境(離職率など)
- 人材育成、公正な評価、処遇制度の運用

人権尊重に対する従業員意識の向上

人権教育の推進

当社グループでは、人権に配慮した事業活動を実践していくために、人権尊重に対する従業員の意識を向上させる教育を推進しています。

従業員が、さまざまな人権課題を認識し、人権に配慮した事業活動の重要性を理解するために、次のような啓発・教育活動を実施しています。また、必要に応じて、人権リスクアセスメントなどの人権マネジメントに関する講習会などに参加して、人権に係るリスクや負の影響を適切に特定・評価するための知識の向上を図っています。

■ 人権尊重に係る認識教育

- 人権尊重やハラスメントをテーマにした職場教育(ミーティング、ディスカッション)
- 人権尊重に対する意識啓発を目的に作成した冊子の配布および社内メールマガジンの配信
- 当社グループのCSR方針を解説したマニュアルの配布
- 海外拠点長を対象にした人権リスクに関する説明会の実施

■ 人権尊重やハラスメントをテーマにした職場教育の実施状況（2018年度）

対象	対象職場数	職場実施率 (%)	平均実施時間 (時間)
株式会社 GSユアサ	301	100	1.5
国内グループ会社	133	100	2.6
合計	434	100	1.8

※株式会社 GSユアサについては全従業員に対して実施

適正な労働環境の維持、向上

Conservation and Improvement of Adequate Working Environment

当社グループは、多様性を尊重し、働きやすい職場環境の維持、向上に努めています。また、現場を重視した人材育成に取り組んでいます。

働きやすい職場環境の提供

基本的な考え方

当社グループは、性別や年齢などに関係なく、誰もがその能力を十分に発揮し、心身ともに健康でいきいきと働き続けることができる職場環境を従業員に提供することが重要であると考え、働きやすさや働きがいを重視した取り組みを推進しています。また、従業員一人ひとりがいきいきとやりがいを持って働いている職場づくりに取り組むプロジェクトを発足して、コミュニケーション豊かな風通しの良い職場環境を従業員に提供する活動を促進しています。

当社グループは、従業員満足度を向上させる取り組みを通じて、優秀な人材の確保や労働生産性の向上による企業競争力の強化を図っています。

■ 新規雇用者の人数と比率（2018年度、国内事業会社）

年齢層	新規雇用者数 (人)		比率 (%)		新規雇用者数の内訳 (人)			
	男性	女性	男性	女性	新卒採用		中途採用	
					男性	女性	男性	女性
10代	37	5	16.9	2.3	37	5	0	0
20代	83	26	37.9	11.9	48	23	35	3
30代	44	8	20.1	3.7	0	0	44	8
40代	11	3	5.0	1.4	0	0	11	3
50代	1	0	0.5	0.0	0	0	1	0
60代	1	0	0.5	0.0	0	0	1	0
合計	177	42	80.8	19.2	85	28	92	14

■ 離職者の人数と離職率 (2018年度、国内事業会社)

年齢層	離職者数 (人)		離職率 (%)	
	男性	女性	男性	女性
10代	1	0	2.8	0.0
20代	9	2	1.8	1.8
30代	21	6	3.2	5.6
40代	6	1	0.7	0.9
50代	8	0	1.0	0.0
60代	11	0	7.0	0.0
合計	56	9	1.9	2.1

■ 従業員の人数と比率 (2018年度、国内事業会社)

区分	人数 (人)		比率 (%)	
	男性	女性	男性	女性
正社員	2,918	448	86.7	13.3
有期雇用社員	201	19	91.4	8.6
合計	3,119	467	87.0	13.0

安全かつ衛生的な労働環境の維持、向上

トップの強い意思に基づいた安全衛生の推進

当社グループは、すべての従業員を怪我や病気から守ることに尽力する旨をコミットメントした当社取締役社長の安全衛生宣言に基づいて、全社一丸となって安全文化構築へ向けた活動を推進しています。

そのために、グループ全体における安全衛生に対する取り組みの基本的な考え方を示した「安全衛生方針」を制定し、グループ全体の安全衛生を統括管理する部門が国内事業所や海外グループ会社の安全衛生管理の強化を図っています。また、各事業部門や事業会社に設置している安全衛生委員会を中心とした組織体制により、日常の安全衛生活動を展開しています。

安全衛生方針

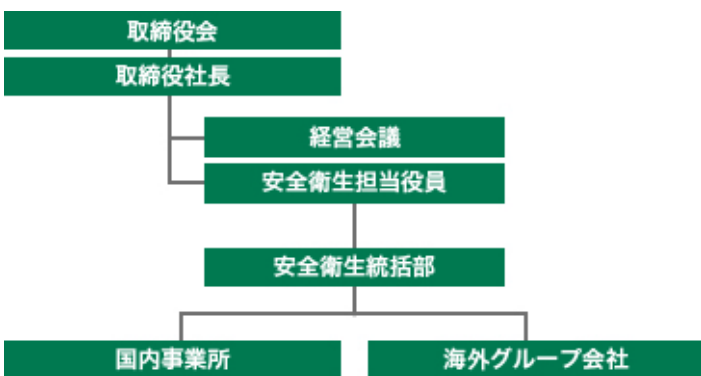
方針

私たちは安全と健康を守る企業風土を構築します。

行動指針

1. 法規制の遵守と共に全ての業務において、安全衛生を確保するための手順を定め、資源を投入します。
2. 管理・監督者は安全衛生の危険源を把握し、その低減措置を計画的に実行します。
3. 管理・監督者は従業員の不安全行動を見逃さず、指導します。
4. 従業員は決められたルールを守り、自らの安全・健康を確保します。
5. 従業員は危険源を発見したときは上司に報告し、改善を求めます。

組織体制の概要



労働災害リスクの低減

当社グループの国内事業所では、歩車分離を進めるソフトポールの構内各所での設置、横断歩道の数や位置の見直し、車両の一方通行化、自転車乗り入れ制限などの取り組みによって、事業所内の安全環境を整備しています。また、工場内のすべての職場では、一斉に安全総点検を実施し、リスクアセスメントによって危険源を特定しています。特定された危険源についてはリスクの大きさに応じたリスク低減措置を実施しています。さらに、作業環境測定による職場環境の実態把握や特殊健康診断による作業員への有害物質の影響をモニタリングし、定期的な監視測定結果に基づいた作業環境の改善に取り組んでいます。

海外グループ会社に対しては、2017年度より電池生産会社18拠点へ安全衛生監査を実施し、安全レベルの把握だけでなく、リスク再評価や危険箇所の指摘改善を行うことで、労働災害リスクの低減化を図っています。また、国内の安全管理基準や運用プロセスなどの安全衛生管理のしくみを海外グループ会社に展開し、グループ全体の安全衛生パフォーマンス状況を管理する取り組みを推進しています。

■ 休業度数率および休業強度率(株式会社 GSユアサ)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
休業度数率※1	0.37	0.55	0.85	0.45	0.47
製造業平均度数率	1.00	1.06	1.15	1.02	1.20
休業強度率※2	0.00	0.01	0.01	0.01	0.00
製造業平均強度率	0.09	0.06	0.07	0.08	0.10

※1 休業度数率：労働時間100万時間当たりに発生する休業者数を示すもので、次の式で表される。

$$\text{休業度数率} = \frac{\text{休業者数}}{\text{延実労働時間数}} \times 1,000,000$$

※2 強度率：労働時間1,000時間当たりの災害によって失われた労働損失日数を示すもので、次の式で表される。

$$\text{強度率} = \frac{\text{休業者数}}{\text{延実労働時間数}} \times \frac{300}{365} \times 1,000$$

労働者の安全意識の向上

当社グループの国内事業所では、安全衛生管理の運用を維持向上させるために、労働者の安全意識の向上を図る活動を実施しています。

また、安全衛生リスクを顕在化させない教育訓練を通して、安全衛生活動の定着化やレベルアップを図っています。なお、本教育プログラムは、国内事業所だけでなく、海外グループ会社に対しても順次展開しています。

[安全意識の向上を図る活動の例]

- 労働安全に対する経営幹部の決意表明書の全職場への掲示
- 安全衛生カード(構内での安全に対する基本事項を示したカード)の配布(構内に立ち入るすべての関係者を含む)
- 安全衛生意識調査の定期的な実施(構内で作業する従業員や請負会社・協力会社の社員が対象)

[安全衛生リスクの顕在化防止に対する教育訓練の例]

- 危険予知訓練やリスクアセスメントなどの安全手法に関する定期的な教育(各職場の安全活動のキーマンとなる安全トレーナーが対象)

適正な労働時間の維持

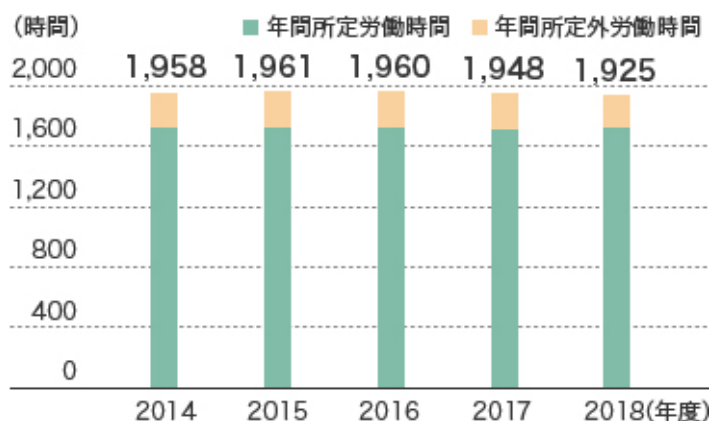
労働時間の最適化

当社グループは、従業員の健康を守り、安心して働ける職場の実現を目指して、労使が協力して労働時間の適正化に取り組んでいます。株式会社GSユアサでは、労働時間の正確な把握と管理を行うシステム（勤怠管理システム、入出門管理システム）を導入して運用しています。また、労使で毎月開催する労働時間専門委員会で長時間労働者などの状況確認を行うなど、適正な労働時間管理に取り組んでいます。

長時間労働となった従業員に対しては産業医面談による健康状態の把握などを行い、上司への長時間労働抑制勧告制度（「働き方改革」参照）により労働時間の削減対策を講じています。また、毎年、従業員に対して労働時間ルールの理解促進と適切な労働時間管理をテーマとしたコンプライアンス教育を実施しています。

2018年度は、国内グループ会社(22社)に対して労働時間管理の現状調査を行い、各社へ調査結果をフィードバックしました。また、必要に応じて、現地訪問による適切な労働時間管理を行うための情報交換などを実施しました。

■ 年間総労働時間



※対象者：一般社員（休職者・海外駐在員除く）

※年間所定労働時間：所定労働時間－休暇取得時間－遅刻および早退などの不在時間

※期間：1月～12月

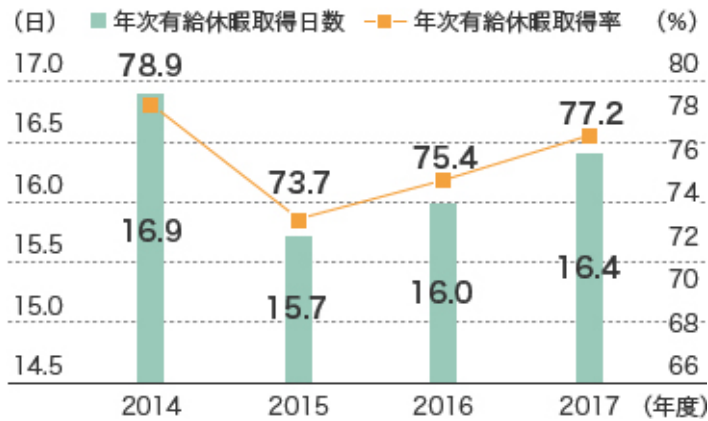
働き方改革

当社グループでは、従業員の心身の健康を維持することによる仕事の効率性や業務に対する創造性の向上を目的として、労使が協力して長時間労働抑制や年次有給休暇の取得促進に取り組んでいます。

メリハリのある働き方を目指す取り組みの事例

- ・ 週1回のノー残業デーの設定
- ・ 年間最低10日間の年次有給休暇取得の義務化
- ・ 所定休日の2日連続労働の禁止
- ・ 深夜帯時間外労働の禁止（午後10時～翌午前5時）
- ・ 基準時間超過労働者のモニタリング、上司に対する長時間労働抑制対策実施勧告制度の運用

■ 年次有給休暇取得率



※対象者：一般社員（休職者・海外駐在員除く）

※期間：9月～8月

TOPICS

当社は「健康経営優良法人」に認定されています

当社と国内グループ会社3社は、経済産業省と日本健康会議が主催する「健康経営優良法人認定制度」において「健康経営優良法人(ホワイト500)」の認定を3年連続で受けました。

本制度は、地域の健康課題や日本健康会議が進める健康増進への取り組みに対して特に優良な健康経営を実践している法人を顕彰するものです。今年度は、特に、働き方改革を目指して全社展開している労働時間の適正化に対する取り組みが高く評価されました。

今後も引き続き、従業員が健康でいきいきと働ける職場環境づくりを目指して、健康経営の促進に努めます。

● 当社グループの具体的な健康施策

1. 労働時間の適正化、ワークライフバランスの確保

- ノー残業デーの徹底
- 年間最低10日間の年次有給休暇取得の義務化
- 1ヶ月の時間外労働上限時間の設定
- 所定休日の2日連続労働の禁止
- 深夜時間帯における時間外労働の禁止

2. メンタル不調者の早期発見と対処および重症化予防

- 産業医や看護職との面談、カウンセリングなどの体制の拡充
- ストレスチェックにおける高リスク者全員に対する看護職との面談勧奨の実施
- ラインケアおよびセルフケア研修の継続的な実施

3. 「がん」の早期発見、早期対処の取り組み

- 従業員やその家族へのがん自己検診の定期的な配布
- 定期健康診断における婦人科検診の実施



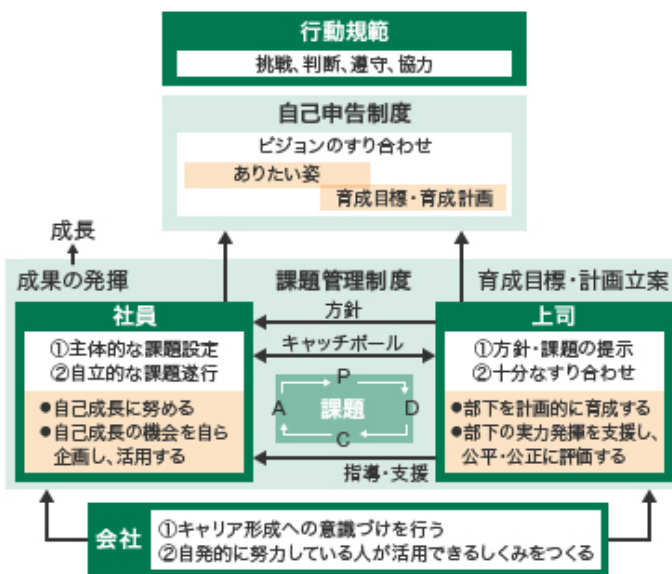
中長期的な人材育成と適切な評価

自律型人材の育成

当社グループでは、現場が企業価値を生み出すエンジンであり、その主役は現場で働く従業員であると考えています。そのために、最善の人材育成の場である日常の活動現場では、課題管理制度を中心としたOJT（On-the-Job Training）を通じて、自律型人材の育成に取り組んでいます。

また、コミュニケーション研修や自由参加型研修などのOff-JT（Off-the-job Training）によって、キャリア開発やマネジメント能力の向上を図っています。なお、キャリア開発については、全従業員がキャリア形成に関するレビューを毎年実施することによって、従業員が主体的に仕事に対する目標やありたい姿を考えていくキャリアマネジメントを促進しています。

■ 人材育成の基本



■ 研修体系

階層別	ビジネススキル	自己啓発
新任部長研修	ロジカルコミュニケーション研修	語学オンラインレッスン
新任課長研修	ファシリテーション研修	通信教育
新任リーダー研修	タイムマネジメント研修	オンライン講座
キャリアアップ研修(6年目)	プロジェクトマネジメント研修	ビジネス実務法務検定®(外部)
スキルアップ研修(3年目)	英文Eメールライティング研修	ビジネス会計検定(外部)
ロジカルコミュニケーション研修(2年目)	外部技能講習	
サポーター研修	グローバル人材養成	
新人研修	海外実習派遣制度(駐在候補者の養成)	
	海外赴任前研修(語学、マネジメントスキル等)	

■ 従業員一人あたりの人材育成研修年間平均時間（2018年度、株式会社GSユアサ）

項目	区分	平均研修時間
性別	男性	1.6時間
	女性	2.5時間
従業員区分	無期雇用	2.2時間
	有期雇用	0.2時間

多様な働き方の尊重

女性活躍の推進

当社グループでは、女性活躍のための環境と機会を提供して女性一人ひとりが輝ける基盤を整備することが、企業理念である「革新と成長」の実現につながると考えています。そのために、女性がこれまで以上に自身の能力を発揮して活躍できる女性活躍推進の施策を実施しています。女性従業員が3つの「L」の相乗効果で自己成長意欲を高めてさまざまな活躍のあり方を増やすことで、一人ひとりが自分の色で輝ける会社を目指しています。

宣言します！

GSユアサは、明るく楽しくポジティブに、
女性の活躍のあり方を多様に実現します！

3つのL



女性活躍推進行動計画（2019年4月1日～2022年3月31日）

- 目標 1** 新卒者の総合職採用に占める女性の割合を毎年度30%以上とする
- 目標 2** 男性の育児参加を促進するため、育児支援制度の理解を図る
- 目標 3** 半日有給休暇の取得上限回数を増やす

■ 女性の役職登用状況（2018年4月1日、国内事業会社）

区分	女性 (人)	全体 (人)	女性比率 (%)
管理職	16	765	2.1
うち部長職以上	2	256	0.8
役員	0	40	0.0

障がい者の雇用

株式会社 GSユアサは、障がい者雇用を推進するために、2007年12月に特例子会社[※]の認定を取得した会社を含め、障がいを持つ従業員に働く場を広く提供しています。

2019年4月1日時点における株式会社 GSユアサの障がい者雇用率は、法定雇用率（2.2%）および前年度実績（2.74%）を上回る2.79%となりました。今後も継続して、障がい者の能力や特性に応じた雇用管理などの取り組みにより働きやすい職場環境の維持および向上に努めます。

[※]特例子会社：子会社が障がい者雇用に特別の配慮をしていると厚生労働大臣から認定を受けた場合に障がい者雇用率の算定において親会社の一つの事業所とみなすことができる障害者雇用促進法による制度

高年齢者の再雇用

当社グループでは、定年を迎えた従業員が豊富な経験や高度なスキル・技能を活かして働き続けられる再雇用制度を運用しています。定年を迎えた従業員が雇用延長を希望する場合、業務の必要性や本人の職務能力などを評価した上で適切な処遇決定や人員配置を実施しています。また、再雇用者が働きがいを持って働くことができるように、現役社員と同様な業務目標管理制度を運用して業務実績を処遇に反映しています。

今後、日本の社会は、少子高齢化が進み、人材確保が困難となる状況が想定されています。当社グループは、高年齢者の雇用に取り組むことで、労働力不足を解消する一つの対策として捉えるだけに留まらず、優秀な高年齢者がスキルやノウハウを発揮することによる持続的な事業成長力の向上を目指しています。

■ 高齢者の再雇用状況（2018年度、国内事業会社）

区分	雇用者数 (人)	雇用率 (%)	再雇用希望者 雇用率(%)
男性	44	77	100
女性	7	100	100
合計	51	80	100

※雇用率：定年退職者における再雇用者の割合

※再雇用希望者雇用率：再雇用希望者に対する雇用の割合

仕事と育児・介護の両立支援

株式会社GSユアサは、次世代育成支援対策推進法に基づく一般事業主行動計画を労使で策定し、「社員が育児に参加しやすい環境づくり」を目指して本計画を達成するための活動に取り組んでいます。また、社内イントラネットに「仕事と育児両立支援掲示板」を開設して、社員に育児関連制度に係る情報を発信しています。さらに、出産・育児、介護に関する支援制度の活用促進のため、マネジメント層に対しても階層別研修などを活用して周知徹底を図っています。

■ 出産・育児、介護に関する支援制度

項目	制度	内容
出産 育児	妊娠中の通勤緩和	妊娠中の女性社員に対して勤務の始めまたは終わりの勤務を免除する制度（最大60分/日）
	産前産後休暇	産前6週間（多胎妊娠の場合は14週間）と産後8週間の休暇を取得できる制度
	妊娠通院休暇・母性保護休暇	妊娠中や出産後1年未満の女性社員が健康診査などのために休暇を取得できる制度
	母性保護休職	妊娠中や出産後1年未満の女性社員が休職できる制度（最長1年間）
	慶弔休暇（出産）	子供が生まれた時に休暇を取得できる制度（3日間）
	育児休業	子供を養育する社員に対して休業できる制度（最長で子供が2歳になるまで対象）
	育児短時間勤務	小学校6年生以下の子供や障がいを持つ子供を養育する社員が短時間勤務やフレックス勤務ができる制度
	看護休暇	小学校3年生以下の子供の看護のために休暇を取得できる制度（子供が一人の場合は5日/年、二人以上の場合は10日/年）
	哺育時間	満1歳に達しない子供を哺育するための時間を取得できる制度（2回/日、各30分）
	時間外労働や深夜労働の免除・制限	子供を養育する社員に対して時間外労働や深夜労働を免除・制限する制度
介護	介護休業	家族を介護する社員が休業できる制度（最長1年間）
	介護休暇	家族を介護する社員が休暇を取得できる制度（対象家族が一人の場合は5日/年、二人以上の場合は10日/年）
	介護短時間勤務	家族を介護する社員が短時間勤務やフレックス勤務ができる制度（最長3年間）
	時間外労働や深夜労働の免除・制限	家族を介護する社員に対して時間外労働や深夜労働を免除・制限する制度
その他	積立休暇	失効した年次有給休暇の積立休暇制度（最大40日、家族の看護・介護、小学校3年生までの子供の育児などの事由による取得）
	時間単位休暇	付与された年次有給休暇のうち1時間単位で休暇を取得できる制度（最大24時間/年）
	在宅勤務制度	仕事と育児・介護の両立を促進するために自宅で業務に従事できる制度
	カムバック制度	子供の養育、家族の介護などを理由に退職した社員が一定の要件を満たした場合に、再度、社員として採用できる制度

■ 育児支援制度の活用状況

年度	女性			男性		
	取得者数 (人)	取得率 (%)	復職率 (%)	取得者数 (人)	取得率 (%)	復職率 (%)
2014	5	100.0	100.0	0	0.0	---
2015	9	100.0	100.0	1	1.1	100.0
2016	7	100.0	88.9	2	3.0	50.0
2017	8	100.0	87.5	1	1.2	100.0

※対象者：一般社員（休職者・海外駐在員除く）

■ 介護支援制度の活用状況

年度	介護休業		介護休暇	
	取得者数 (人)	復職率 (%)	取得者数 (人)	延べ日数 (日)
2014	2	100.0	12	42.5
2015	1	100.0	7	26.5
2016	1	100.0	10	30
2017	1	100.0	14	63.5

※対象者：一般社員（休職者・海外駐在員除く）

※期間：4月～3月(介護休業)、9月～8月(介護休暇)

TOPICS

株式会社GSユアサは「くるみんマーク」を取得しています

くるみんマークとは、次世代の社会を担う子どもたちの健全な育成を支援する次世代育成支援対策推進法に基づき、行動計画の策定や目標の達成などに関わる基準を満たした企業として厚生労働大臣が認定した場合に取得できるマークです。

当社グループは、今後も従業員が安心して仕事と育児を両立させることができる環境整備とその効果の拡充を図ることにより、継続的な子育てサポート企業を目指していきます。



現地の宗教上の慣習に配慮した事業運営

イスラム教徒が多数を占めるインドネシアに所在する海外グループ会社では、イスラム教の伝統や慣習に配慮した事業運営を行っています。

PT. Yuasa Battery Indonesia、PT. Trimitra Baterai Prakasa、PT. GS Batteryでは、事業所内にモスクを設置しています。従業員には就業時間中におけるモスクでの礼拝を認めており、毎週金曜日の礼拝には社外からも信者が集まってきます。

当社グループは、現地の慣習、文化的価値観、宗教などを理解し尊重することが、現地従業員との良好な関係を築き、事業運営を効果的に進める上で不可欠であると考えています。

安全、安心な製品、サービスの提供

Fulfillment of Our Responsibilities to Provide Safe and Secure Products and Services

信頼されるメーカーとして、お客様の満足度向上と安全性の確保に取り組んでいます。

安全性と品質の重視

全社品質マネジメントによる品質と安全への対応

当社グループは、「品質基本方針」に基づき、グループ全体でお客様に提供する製品とサービスの質向上を目指した活動を推進しています。また、常にお客様に信頼されるメーカーであり続けるため、お客様視点での「ものづくり」の追求と製品・サービスの質向上に努めています。

そのために、ISO9001をベースにした「GSユアサ品質マネジメントシステム」を定め、事業部門を横断した品質マネジメント体制を経営トップ主導で推進しています。製品・サービスの品質は、品質担当役員である取締役を委員長とした「品質統括委員会」で毎月審議され、迅速に対応しています。また、「ものづくり」を追求する取り組みの中で、全従業員への品質教育の提供や全社改善チーム活動の推進を通じて、従業員の品質意識と品質管理の知識・力量を高め、製品・サービスの質向上につなげています。

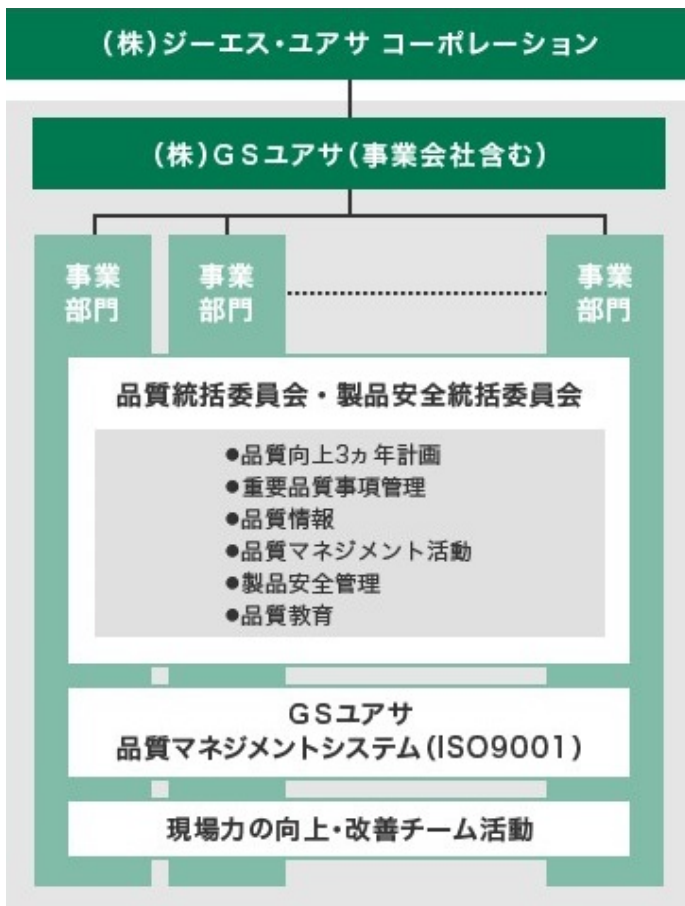
このような活動が日本科学技術連盟に評価され、産業電池電源事業部産業電池生産本部は品質管理の実践などにより成果をあげた個人や企業に贈られるデミング賞を2015年度に受賞しました。

▶ [「2015年度デミング賞」受賞について詳細はこちらをご覧ください](#)

品質基本方針

GS YUASAは、企業理念の実現に向け、「ものづくり」を研鑽し、
お客様を第一に考え、製品とサービスの質向上に努めます。

■ 品質マネジメント体制



トップ巡視活動

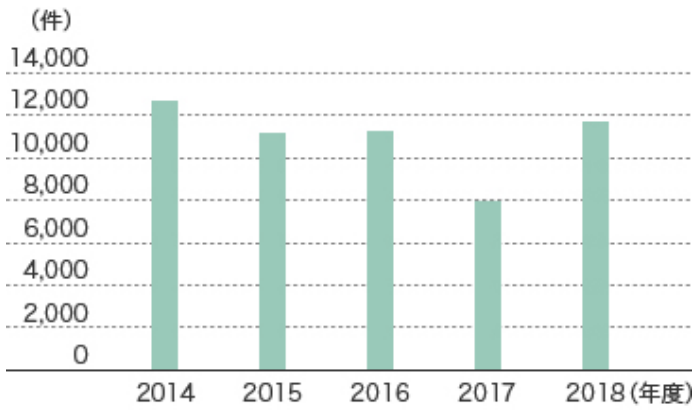
当社グループでは、国内の工場や支社などを中心とした経営幹部の現場巡視活動を計画的に実施しています。トップ巡視活動とは、経営幹部がトップマネジメントの一環として、現場のありのままの姿を把握し、現場で働く従業員と対話を行う取り組みです。仕事の「質」を切り口にして、安全、品質、環境などのテーマに対して、実際の活動状況や課題などを経営幹部と共有し、意思疎通を図っています。現場担当者や若手管理職が現場の課題や活動状況を報告することによって、経営幹部との意見交換の場となっています。

お客様満足の上を推進

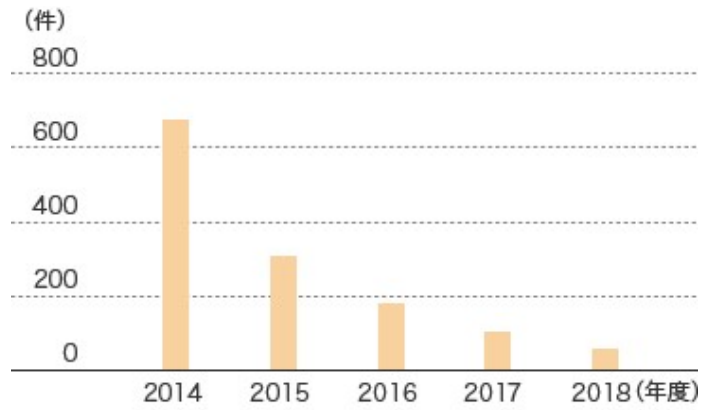
当社グループは、お客様からの製品やサービスに関するご意見、ご提案、苦情などを「お客様の声」として大切にしています。当社グループでは、メールでのお問い合わせに加え、お客様相談室に寄せられる「お客様の声」から製品やサービスの改善を行っています。2017年度からは、お問い合わせ内容に適した受付窓口にダイレクトコールする音声ガイダンスを採用した対応を開始して、お客様の利便性向上に取り組んでいます。

なお、お客様から頂戴した苦情の件数は減少傾向で推移しています。今後も、「お客様の声」を真摯に受け止め、お客様満足のさらなる向上に努めます。

■ お客様相談室へのお問い合わせ件数



■ お客様からの苦情件数



GSユアサ お客様相談室 当社グループの製品に関するご質問やご相談を承っています。

フリーダイヤル **0120-43-1211** 受付時間：9：00～17：30（土日祝日や当社所定の休日を除く）、日本国内のみ対象

TOPICS

顧客企業より最優秀サプライヤー賞を受賞

当社グループの事業子会社である株式会社 ジーエス・ユアサ テクノロジーとGS Yuasa Lithium Powerは、宇宙用リチウムイオン電池の開発において、米国ボーイング社から2018年最優秀サプライヤー賞を受賞しました。

当社グループ製の宇宙用リチウムイオン電池は、これまでも国内・海外の多数の人工衛星や宇宙ステーション補給機に採用されています。

今回の受賞は、このような実績や開発力、技術サポート力、対応力が、ボーイング社の人工衛星の性能向上や次世代製品の開発に大きく貢献していると評価されたものです。

当社グループは、今後も高品質で安心な製品の提供を通じて、お客様の満足度向上に努めていきます。

製品安全への取り組みと迅速な情報の伝達

当社グループの製品は、電気エネルギーを蓄積、制御、変換するため、製品の安全性確保を重要な課題として位置付けています。

そのために、製品安全統括委員会を中心とした全社的な組織体制を構築して製品の安全性を確保する活動を推進しています。各事業部門では、製品安全規格への適合に加え、製品の使用環境や経年劣化時の安全性を考慮した製品開発を行うために、FMEAやFTAなどを活用した製品実現プロセスを強化しています。また、製品の不安全事故に対する情報を日常的に収集し、経営トップに遅滞なく伝達することで、迅速な市場対応を行う体制を構築・運用しています。

今後は、品質工学や製品安全などを指導できる人材の育成や製品安全情報の積極的な開示を推進し、“信頼と品質のGS YUASA”を目指します。

■ GSユアサの製品安全活動フロー

フロー	活動内容	手順・仕組み
情報のフィードバック	製品安全統括委員会 ◇製品安全活動に関する方針の制定 ◇製品安全に関する問題の審議 ◇「危機管理対策本部」設置による対応	リスク管理規則 GSユアサ品質マネジメントシステム 製品安全に関する管理規定
	製品安全活動 ◇事業部門での「製品安全」に関する方針の制定 ◇製品実現プロセスにおける製品安全活動	部門方針書 各事業部門の品質マニュアル
	製品・サービスの情報収集 ◇製品安全に関する情報収集 ◇製品・サービスに対する苦情・不具合、製品事故情報	クレーム情報システム・お客様相談室 GSユアサホームページ 品質日報
	情報の検討・処置 ◇情報の検討、処置の決定と実施、継続的改善(再発防止) ◇製品事故・品質クレームに関する危機管理対応 ◇危害発生および拡大防止の対策	事業部門の品質マニュアル 製品事故・品質クレームに関する危機管理マニュアル リコール実施マニュアル

従業員の商品品質意識向上

当社グループは、品質基本方針に基づく品質意識を全社に定着させるため、従業員の品質教育に取り組んでいます。品質管理の能力レベルと職群階層に応じて体系化した品質教育プログラムにより、全従業員が業務内容と経験に合わせた教育を受講するしくみを運用しています。

また、2008年度からは新入社員に対する品質基礎教育を義務化し、品質管理の知識レベルをQC（品質管理）検定の受検結果で評価しています。2018年度は、QC検定1級から4級を合わせて244名が合格し、全社のQC検定の累計合格者数は2,456名となりました。当社グループは、従業員の品質意識向上と知識取得に向けた品質教育を重要課題として取り組むことにより、品質損失の減少に寄与する活動を推進しています。

■ 品質教育体系図

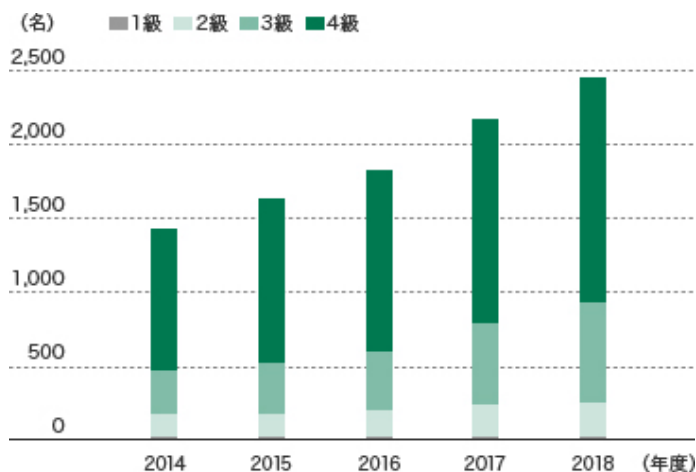
品質管理知識レベル	品質教育講座				外部セミナーなど	対象階層、職群(目安)	QC検定対応レベル
応用	ものづくり専門教育(実践的な管理技術の知識習得)				品質管理通信教育(QC検定2級受検準備コース)(推奨)	係長、リーダー(技術開発部門、品質管理部門)	2級
	内部品質監査員養成	製品安全	品質工学	FMEA			
基礎	品質マネジメントシステム要求事項	サンプリング、抜取検査	ばらつき基礎	信頼性基礎	品質管理通信教育(QC検定3級レベル対応)(推奨)	入社2年以降の全社員	3級
	新QC七つ道具	管理図基礎	統計基礎	QC検定3級受検支援			
入門	QCストーリー、QC七つ道具					新入社員	4級
	品質基礎講座(新入社員必須、一般)						

*QC検定対応レベルは参考です

■ 品質教育の講座数と受講者数 (2018年度)

品質管理 知識レベル	講座数	受講者数
入門	8	206
基礎	11	328
応用	29	243
合計	48	777

■ QC検定 累計合格者数



「ものづくりエキスパート」教育による品質管理人材の育成

当社グループでは、設立100周年を契機に、当社グループの品質基本方針に掲げる「ものづくりを研鑽」できる人材を育成することを目的に、2017年10月より「ものづくりエキスパート」教育研修会を継続的に開催しています。

本研修会では、主に設計開発に必要な管理技術を習得し、それを実践できる能力を持つ人材の育成を目指しています。本研修会の受講生は、1年の研修期間を経てエキスパートとなり、その知識と経験を活用して職場での品質改善の中心メンバーとなることが期待されています。

活動事例

改善チーム活動の事例発表会

当社グループでは、製品・サービスの質の向上を目指すために、従業員が品質に係る問題意識を高めて積極的な品質管理を実施する改善チーム活動を推進しています。また、次の事項を目的とした改善チームによる事例発表会を2004年度から継続的に開催しています。

- 現場力向上活動の推進
- 改善活動・成果からの学習および水平展開
- 改善活動への全員参加
- 活発なコミュニケーションの推進
- 改善マインドの風土作り

2018年度は本発表会を2回(7月、12月)開催しました。経営幹部や多数の従業員が参加する中で、海外グループ会社を含む各事業部から推薦を受けた改善チームが改善事例を発表しました。事例発表後には、品質担当役員が各発表チームの個別講評と全体講評を行い、当社取締役社長が発表チームに対する労いと発表会の総評を行いました。また、当社取締役社長による「奨励賞」や参加者の投票による「感動賞」が発表チームに授与されました。

近年の発表会では、品質関係部門の改善チームのみならず、営業部門、開発部門、海外グループ会社からの発表もあり、発表テーマはバラエティに富んでいます。

当社グループでは、品質管理の力量は誰もが身に着けなければならないものと考えています。本発表会を通じて、現場での経験・ノウハウをグローバルに共有し、改善の成果を水平展開することで、今後もさまざまな改善に取り組んでいきます。

■ 2018年度発表テーマの例

- リチウムイオン蓄電池組立工程における稼働率の改善
- カラワン工場(インドネシア)における不良品コストの削減
- 自動車用鉛蓄電池工場における工程内不良率の低減
- 電動車両用鉛蓄電池生産工程における仕掛在庫の低減
- プロセス可視化による知的財産業務の改善
- 検査業務におけるITを活用したトレーサビリティシステムの改善
- GSユアサにおける安全文化の構築に向けて



発表会関係者の集合風景



発表風景

重要品質事例展の開催

当社グループは、製品の不具合発生を未然防止する上で、現場での失敗ほど有意義な学びの機会はないと考えています。そのために、製品に関する過去の不安全事故の発生事例や重要品質問題を従業員に情報共有することにより、同じ品質問題を二度と起こさない取り組みを2016年度から開催しています。

2018年度は、重要品質問題事例展(以下、重品展)を当社グループの京都事業所で開催し、320名の従業員が参加しました。重品展は、過去の重要品質問題の発生に対する原因や発生メカニズムなどをパネルなどで掲示することにより、過去の失敗事例を教訓として従業員に認識させることを目的としています。また、教訓の理解をより深めるために、各展示に関するプレゼンテーションや質疑応答などを行うエリアを会場内に設置しています。

参加者のアンケート結果から、重品展が従業員の品質問題に対する認識力を向上させる効果的な取り組みであると考えています。今後も、参加者の要望を考慮した改善を行いながら、過去に発生した失敗を風化させずに教訓として将来に伝達する重品展を継続的に開催していきます。



重品展の会場の様子



プレゼンテーションの様子

地球環境の保全

Global Environmental Conservation



環境基本方針、環境中期計画

当社グループは、事業活動、製品、サービスが地球環境に与える影響を考慮した環境保全に努め、継続的な改善を行います。

環境基本方針

近年、気候変動に関連する問題のみならず、ステークホルダーの環境に係る当社グループへのニーズや期待はますます大きくなっており、かつ多様化しています。当社グループは、このような状況を考慮した上で、脱炭素社会の実現や循環型社会への貢献は実践しなければならない社会的責任の一つであると考えています。

当社グループでは、環境面で果たすべき社会的責任を明確にし、持続可能な社会の実現に貢献するために、グループ全体における環境に対する取り組みの基本的な考え方を示した「環境基本方針」を制定しています。また、グループ全体における環境負荷の低減や環境汚染事故の未然防止を推進するための環境マネジメント体制を構築しています。

環境基本方針

● 基本理念

GSユアサグループは、地球環境保全を、経営の最重要課題の一つとして取り組み、クリーンなエネルギーである電池をはじめ、電源システム・照明機器などの開発・製造・販売を通じて、持続可能な社会の実現に貢献します。

● 行動指針

1. 事業活動、製品、サービスが環境に与える影響を確実に評価し、省エネルギー、省資源、廃棄物の削減と再資源化を通じて汚染の予防を含む環境保護に努め、これらを継続的に改善して、環境パフォーマンスの向上を目指します。
2. 原材料の取得、開発・設計、生産、輸送、使用、廃棄の各段階における製品のライフサイクルに係る環境負荷の低減を考慮し、環境保全に配慮した製品の開発・設計を推進します。
3. 資材調達・物流等すべての取引先様を含むサプライチェーン全体の環境負荷の低減に取り組みます。
4. ISO14001規格に準拠した環境管理体制を構築し、この環境基本方針に基づく各事業所の環境方針を制定し、環境目標を設定して、環境管理活動を推進します。
5. 環境に関連する法、条例、協定等の規制及びグループが同意するその他の要求事項を順守することはもとより、必要に応じて自主管理基準を策定して環境保全に努めます。

6. 環境監査及びマネジメントレビューを適切に実施し、環境マネジメントシステムの維持、継続的改善を図ります。
7. 教育・訓練等により、グループ全従業員の環境への意識をより高め、環境保全活動を通して、社会に貢献します。
8. この環境基本方針を含め、環境に関連する情報を適切に開示し、利害関係者をはじめとする社会との良好なコミュニケーションに努めます。

環境中期計画

当社グループの環境基本方針に係る重点事項については、持続可能な社会の実現に貢献することを目的とした環境中期計画を策定し、その実施状況を管理しています。2018年度は第3次環境5カ年計画の最終年度であるため、当該計画の総括を実施した上で2019年度以降の環境中期計画への展開を図っています。

なお、2019年度以降の環境中期計画における適用範囲については、従前の国内4事業所から国内および国外の27事業所へと拡大しています。また、本計画は、当社グループの第5次中期経営計画と連動した環境目標を設定しており、グループ全体の重要な経営課題に対応する事業戦略の1つとして推進しています

第3次環境5カ年計画の総括（2014～2018年度）

対象事業所：株式会社GSユアサ国内4事業所（京都、長田野、群馬、小田原）

重点項目 目 標	総括	自己評価／課題
<p>省エネルギー、温室効果ガスの削減</p> <p>2018年度の生産に係るCO₂排出原単位を2013年度比5%以上削減する。</p>	<p>生産に係るCO₂排出原単位が2013年度比11.0%削減した。(11.8g-CO₂/Wh)</p>	<p>高容量化した環境配慮型製品の販売比率の増加や業務の効率化(蓄電池充電プロセスの改善など)を図った結果、目標を達成した。</p>
<p>2018年度の物流に係るエネルギー使用原単位を2013年度比5%以上削減する。</p>	<p>物流に係るエネルギー使用原単位が2013年度比7.2%削減した。(0.0475L/トンキロ)</p>	<p>2014年度以降、貨物輸送量は横ばいであるが、モーダルシフトの拡大などにより、原単位を大幅に改善している。</p>
<p>効果的なエネルギーマネジメントシステムを構築・運用する。</p>	<p>環境マネジメントシステムを活用した省エネルギー活動を実施した。</p>	<p>エネルギーに係る経営リスクに対応したしくみを運用する必要がある。</p>

<p>重点項目</p> <p>目 標</p>	<p>総括</p>	<p>自己評価／課題</p>
<p>省資源</p> <p>仕損じ・不良品費を削減する (ISO9001と共通課題化)</p> <p>2018年度の鉛スクラップ率を 2%以下にする。</p>	<p>鉛スクラップ率が3.2%となった。</p>	<p>2014年度から改善傾向にあるが、目標は未達成である。生産性向上と環境適合設計の連携により、ムダ・ロスを低減する取り組みを強化する必要がある。</p>
<p>2018年度の生産に係る排水量を2003年度比77%以上削減する。</p>	<p>排水量を2003年度比59%削減した。(918千m³)</p>	<p>目標は未達成だが、水の循環利用率は増加傾向にある。今後も水の循環利用を推進し、改善活動を継続する。</p>
<p>再資源化</p> <p>2018年度の使用済み産業用製品に対する広域認定処理率を100%にする。</p>	<p>使用済み産業用製品に対する広域認定処理率が98%となった。</p>	<p>使用済み産業用製品に対する広域認定処理率はほぼ100%となった。当該制度による再資源化スキームは定着している。</p>
<p>次世代型リチウムイオン電池の再資源化システムを構築する。</p>	<p>次世代自動車に搭載されるリチウムイオン電池の回収スキームを検討した。</p>	<p>市場拡大が見込まれる次世代自動車に使用されるリチウムイオン電池の適切な再資源化スキームを確立することが重要である。</p>
<p>2</p> <p>環境配慮製品</p> <p>環境配慮設計による製品 (DfE製品) を普及させる。</p>	<p>2005年10月に発行した製品環境適合設計ガイドラインを活用した製品の開発・設計を実施した。</p>	<p>製品の用途展開の多様化に比べて、製品設計への環境配慮の対応が不足している。</p>
<p>3</p> <p>グリーン調達の推進</p> <p>サプライヤー様における環境マネジメントシステムの認証登録の取得およびレベルアップに対する支援を行う。</p>	<p>環境マネジメントシステムの認証を取得したサプライヤー様との取引実績が全取引額の94%を占めた。</p>	<p>サプライヤー様に対する環境マネジメントシステムの導入実績は一定水準に達したと考える。今後は、レベルアップ支援に向けた活動を推進することが重要である。</p>

<p>重点項目</p> <p>目 標</p>	<p>総括</p>	<p>自己評価／課題</p>
<p>化学物質の管理</p> <p>化学物質管理ガイドラインの対象物質におけるマテリアルフローを監視する。</p>	<p>グリーン調達活動と連携して、製品に含まれる化学物質の管理を徹底し、国内外の製品含有規制に対応した。</p>	<p>法規制や顧客要求に対応した製品含有化学物質管理を継続的に実施することが重要である。</p>
<p>4 環境リスク管理の徹底</p> <p>環境マネジメントシステムを活用して、ライフサイクルにわたる環境リスク管理を徹底する。</p>	<p>環境マネジメントシステムを活用した環境リスク管理を実施した。</p>	<p>事業課題やステークホルダーのニーズや期待などに対応した環境リスク管理を効果的に運用することが重要である。</p>
<p>5 法順守</p> <p>環境法規制より厳しい自主管理基準を設定して環境管理技術の改善を推進する。</p>	<p>環境汚染に直結する緊急事態の発生はなく、環境関連の訴訟、罰金、過料などの発生もなかった。</p>	<p>コンプライアンスの徹底化を図る効果的な環境リスク管理を実施することが重要である。</p>
<p>6 環境マネジメントシステムの維持、継続的改善</p> <p>効果的な環境経営の実現に向けた環境マネジメントシステムの継続的改善を図る。</p>	<p>定期的実施した内部監査や外部審査による指摘事項を活用して、環境マネジメントシステムの改善を図った。</p>	<p>環境リスク管理の徹底化を図るために、環境マネジメントシステムを継続的に改善することが重要である。</p>
<p>7 社会貢献</p> <p>環境保全活動へ積極的および継続的に参加する。</p>	<p>事業所周辺の清掃などの活動に取り組んだ。</p>	<p>ステークホルダーのニーズや期待に対応した社会貢献や環境コミュニケーションを推進することが重要である。</p>
<p>8 環境コミュニケーション</p> <p>環境・社会報告書などにより環境情報の開示範囲を拡大し、環境管理活動の社会的評価を得る。</p>	<p>G Sユアサレポートの発行など多様なステークホルダーに対応した外部コミュニケーションを実施した。</p>	<p>ステークホルダーのニーズや期待に対応した社会貢献や環境コミュニケーションを推進することが重要である。</p>

■ 第5次中期経営計画に係る主な環境目標 (2019~2021年度)

対象事業所：国内および海外の27事業所(国内：7事業所、海外：20事業所)

項目	目標値(2021年度)
CO ₂ 排出量	2018年度比6%削減
水使用量	2018年度比8%削減
全製品の売上高に占める環境配慮製品の販売比率	35%以上
全鉛蓄電池に使用される鉛原材料の再生鉛使用重量の比率	35%以上

環境マネジメントシステム

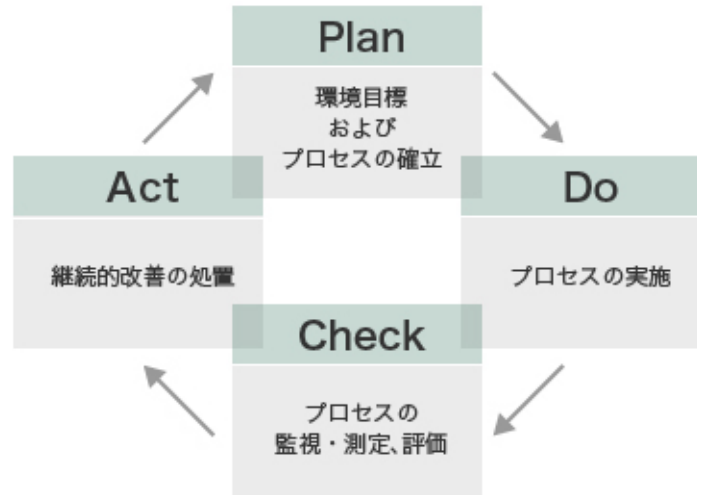
国際標準規格に準拠した環境マネジメントシステムを運用しています。

環境マネジメントシステムの運用

当社グループでは、国際標準規格であるISO14001規格に準拠した環境マネジメントシステムを構築・運用しています。

各事業所では、環境マネジメントシステムの体系的なしくみであるPDCAサイクル(計画→実施・運用→パフォーマンス評価→改善)を効果的に活用することで、環境パフォーマンスを継続的に改善しています。

■ PDCAサイクル

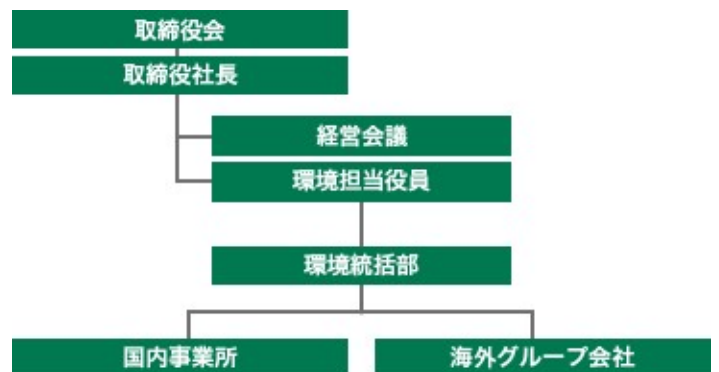


組織体制

当社グループの環境マネジメントにおける組織体制は、当社取締役社長を「環境管理最高責任者」とし、直属に実務責任者として「環境担当役員」を置いて、グループ全体の環境管理体制を統括しています。環境基本方針を含むグループ全体の環境に係る戦略については、経営会議にて審議・決定されます。

また、国内事業所や海外グループ会社に対する環境マネジメント体制を整備することによって、効率的で迅速なグループ内コミュニケーションを実現する体制を整備しています。2018年度からは、主要な国内生産事業所において、環境マネジメントシステムの国際規格であるISO14001の認証範囲を事業所単位からグループ単位に統合することによって、当社グループの環境目標を戦略的に達成する体制を構築しています。

■ 組織体制の概要



※国内事業所のうち、4事業所がISO14001統合認証を実施済み(2019年度には7事業所統合体制に拡大予定)

※海外グループ会社のうち、20生産拠点がISO14001認証を取得して運用

国内外の生産拠点におけるISO14001規格の認証取得率	96%
------------------------------	-----

環境監査

当社グループの各事業所では、環境方針や環境目標の達成状況、環境マネジメントシステムの運用状況などを確認する内部監査を実施して、パフォーマンスおよびシステムの改善につなげています。また、環境マネジメントシステムの適合性および有効性を把握するために環境認証機関による外部審査を受審しています。

内部監査	外部審査
<p>社内外の研修を受けた資格を有する内部環境監査員が次の状況を確認しています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 環境関連法規制などの順守状況（順法性監査） 2. 環境マネジメントシステムの維持管理状況（システム監査） 3. 環境目標の達成程度（パフォーマンス監査） 	<p>ISO14001規格に基づく環境マネジメントシステムの維持管理状況およびPDCAサイクルの機能状況などを受審した結果、全事業所がISO14001規格の認証を継続しています。第三者の視点による環境管理活動の評価や改善ポイントなどの情報を活用して、環境マネジメントシステムの継続的改善を図っています。</p>

環境教育

当社グループでは、環境マネジメントシステムの運用を維持向上させるために、各種の環境教育を実施しています。また、環境リスクを顕在化させないための教育訓練も定期的を実施しています。

環境一般教育

■ 従業員教育

各部門では、すべての構成員に対して、環境方針の達成に向けた自分の役割を認識させる教育を実施しています。

■ 新入社員教育

新入社員に対して、当社グループの環境管理の基本的な考え方を認識させる教育を実施しています。

環境専門教育

■ 内部環境監査員研修

各事業所では、環境マネジメントシステムの継続的改善を図るため、内部環境監査員の養成およびレベルアップ教育を実施しています。

■ 緊急時対応訓練

各部門では、環境に著しい影響を及ぼす可能性のある業務に従事する構成員に対して、想定される緊急事態に対応するための訓練を定期的を実施しています。

環境コンプライアンス管理

当社グループでは、順守しなければならない環境関連法規制などを定期的に見直し、モニタリング活動などを通じて、法令順守に係る運用を適切に管理しています。

また、鉛などの有害物質を製品に使用しているため、種々の環境関連法規制を順守して事業活動を行うことはもとより、使用済み製品の再資源化システムの運用に係る法規制などについても十分考慮しています。

2018年度は、環境関連法規制に係る訴訟、罰金、過料などは発生していません。

環境リスクマネジメント

当社グループでは、ステークホルダーからの多様化する環境ニーズを考慮した環境リスクマネジメントを推進しています。また、各事業所では、環境関連の法令や地域の条例・協定に基づく規制基準より厳しい自主管理基準を設定した運用管理によって、環境汚染の予防を図っています。

環境に著しく悪影響を与える可能性のある業務に対しては、ハード対策(見える化、流出防止、除害装置の設置など)やソフト対策(設備点検、監視・測定、運用手順の徹底など)を講じることによって、環境汚染リスクの低減を実現しています。

また、万が一、緊急事態が発生した場合に備え、被害を最小化するための緊急時対応訓練を定期的実施しています。

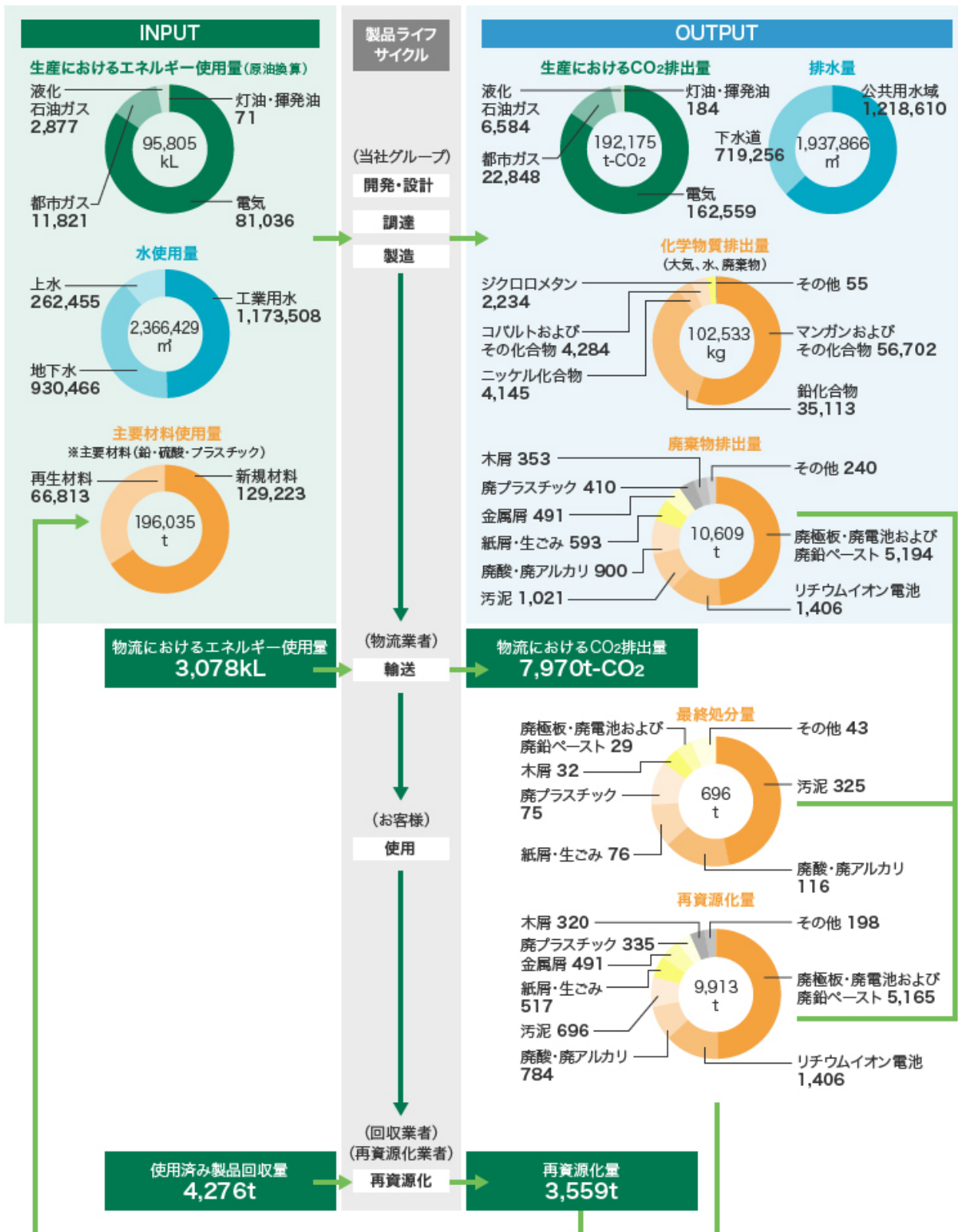
2018年度は、重大な環境汚染に直結する緊急事態が発生した事業所はありません。

なお、2019年度からは、気候変動に起因するリスクが当社グループの将来の事業活動に与える影響を分析・評価した上で、気候変動リスクに対応する取り組みを開始しています。

環境パフォーマンス、環境会計

環境パフォーマンスの継続的改善や有効性評価に取り組んでいます。

ライフサイクルにおけるマテリアルフロー



■ 備考

- (1) 本データは、国内7事業所における2018年度の環境パフォーマンスを集計したものです。
((株)GSユアサ(京都事業所、長田野事業所、群馬事業所、小田原事業所)、(株)GSユアサ エナジー、(株)リチウムエナジー
ジャパン、(株)ジーエス茨城製作所)
- (2) 輸送に係るエネルギー使用量およびCO₂排出量は、(株)GSユアサの値を表しています。
- (3) 再資源化に係る使用済み製品回収量と再資源化量は、産業用電池および電源装置の値を表しています。
- (4) 電気の使用に伴うCO₂排出量の算出におけるCO₂換算係数は、電気事業低炭素社会協議会が公表しているCO₂排出原単位を使用しています。

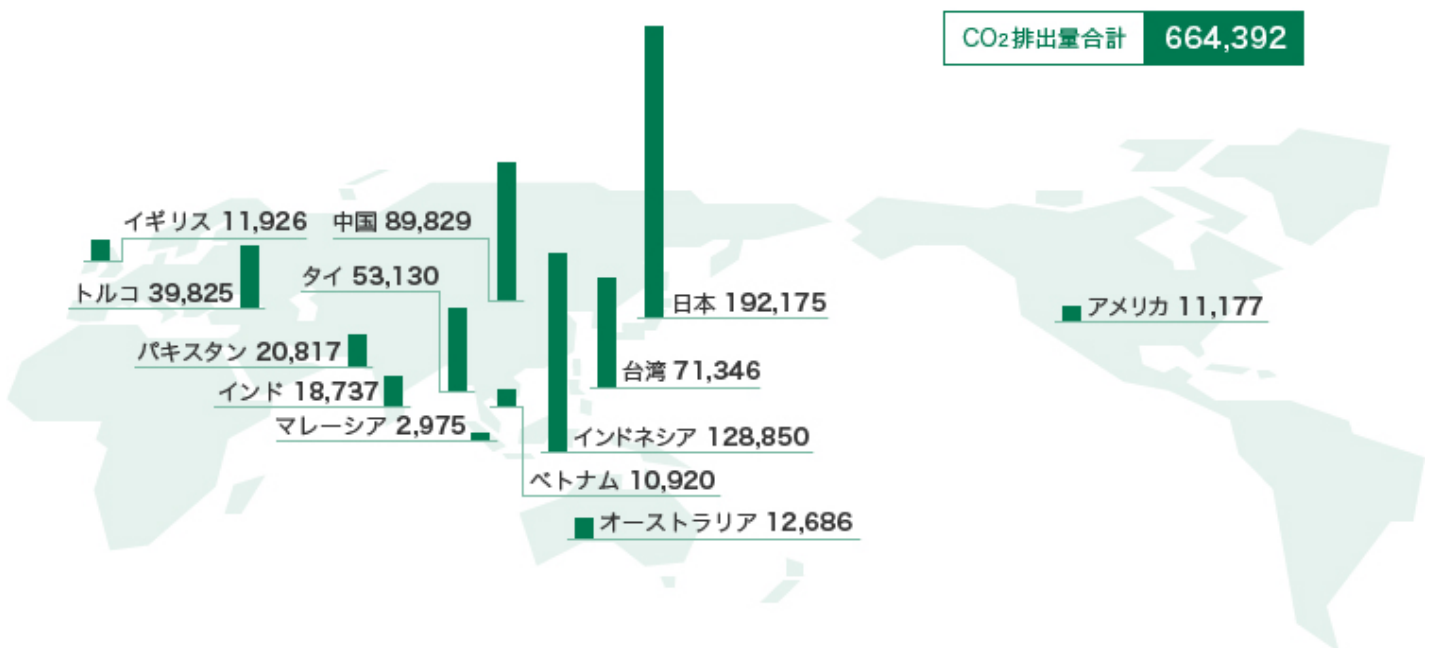
※本グラフの値を見直した結果、「生産におけるエネルギー使用量」と「生産におけるCO₂排出量」の実績値を当初の公表値から修正しています。

世界各国の生産拠点におけるCO₂排出量と水使用量の削減

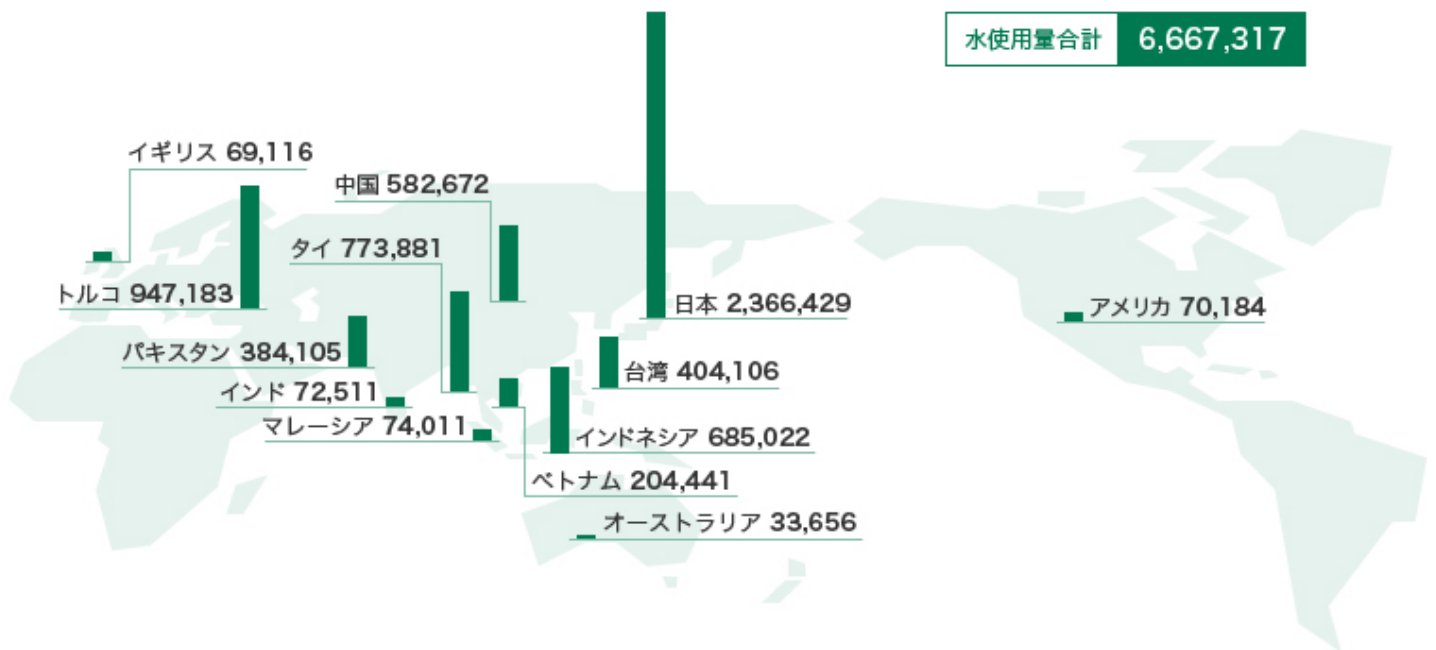
当社グループでは、世界各国の生産拠点のCO₂排出量や水使用量の調査を実施し、生産活動に伴うCO₂排出量や水使用量の把握および削減に対するグローバルな取り組みを行っています。

世界各国の主な生産拠点における2018年度のCO₂排出量と水使用量を下図に示します。2019年度からは、当社グループの中期経営計画にこれらのグローバルな削減目標を組み込むことで、事業戦略と一体となった脱炭素社会や持続可能な社会に貢献する取り組みを推進しています。

■ 各国のCO₂排出量 (単位：t-CO₂)



■ 各国の水使用量 (単位：m³)



■ 各国の生産拠点のCO₂排出量と水使用量

国	生産拠点	CO ₂ 排出量 (t-CO ₂)	水使用量 (m ³)
日本	株式会社 GSユアサ (京都事業所、長田野事業所、群馬事業所、小田原事業所)	124,186	1,127,913
	株式会社 GSユアサ エナジー	30,463	982,669
	株式会社 リチウムエナジー ジャパン	32,757	102,262
	株式会社ジーエス茨城製作所	4,769	153,586
中国	天津杰士電池有限公司	36,970	218,890
	湯浅蓄電池 (順徳) 有限公司	27,247	175,893
	広東湯浅蓄電池有限公司	17,099	169,862
	杰士電池有限公司	8,512	18,027
台湾	台湾湯浅電池股份有限公司	50,187	119,350
	台湾杰士電池工業股份有限公司	21,159	284,756
ベトナム	GS Battery Vietnam Co., Ltd.	10,920	204,441
マレーシア	GS Yuasa Battery Malaysia Sdn. Bhd.	2,975	74,011
インドネシア	P.T. GS Battery	65,840	377,301
	P.T. Trimitra Baterai Prakasa	38,582	132,035
	P.T. Yuasa Battery Indonesia	24,428	175,686
タイ	Siam GS Battery Co., Ltd.	34,162	564,332
	Yuasa Battery (Thailand) Pub. Co., Ltd.	12,423	175,516
	GS Yuasa Siam Industry Ltd.	6,545	34,033

国	生産拠点	CO ₂ 排出量 (t-CO ₂)	水使用量 (m ³)
インド	Tata AutoComp GY Batteries Private Limited	18,737	72,511
パキスタン	Atlas Battery Ltd.	20,817	384,105
トルコ	Inci GS Yuasa Aku Sanayi ve Ticaret Anonim Sirketi	39,825	947,183
イギリス	GS Yuasa Battery Manufacturing UK Limited	11,926	69,116
アメリカ	Yuasa Battery, Inc.	11,177	70,184
オーストラリア	Century Yuasa Batteries Pty. Limited	12,686	33,656

■ 算出基準

項目	日本	日本以外
対象期間	2018年4月1日～2019年3月31日	2018年1月1日～2018年12月31日
対象組織数	7	20
電力CO ₂ 換算係数	電気事業低炭素社会協議会の公表値	GHGプロトコルの各国ごとの係数

※本グラフおよび本表の値を見直した結果、CO₂排出量の実績値を当初の公表値から修正しています。

CO₂排出量と水使用量に関する第三者評価の活用

当社グループは、企業に対して気候変動への戦略や具体的な温室効果ガスの排出量に関する公表を求めるプロジェクトであるCDPの気候変動質問書に対応しています。また、気候変動と同様に、水リスクへの取り組みに対する質問書にも対応しています。CDPによる評価結果を活用して、気候変動の緩和と適応および水リスクに対する認識や対応戦略への取り組みを推進しています。

なお、開示する温室効果ガス排出データの信頼性を担保するために、SGSジャパン株式会社による第三者検証を受けています。今後も、第三者検証を継続的に実施することによって、より正確なデータを開示するように努めていきます。

▶ [SGSジャパン株式会社による第三者検証意見書\(2018年度\)](#) 

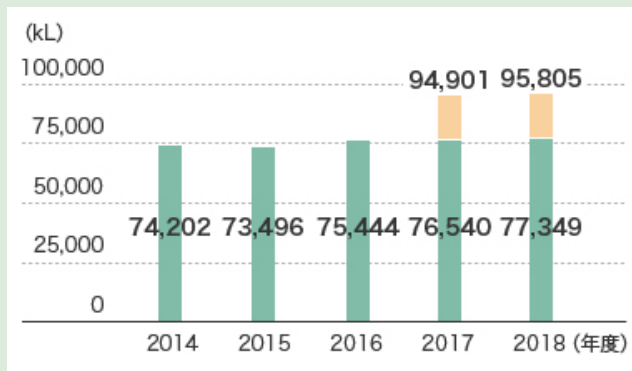
環境パフォーマンス推移データ

環境パフォーマンス推移情報に係る集計範囲

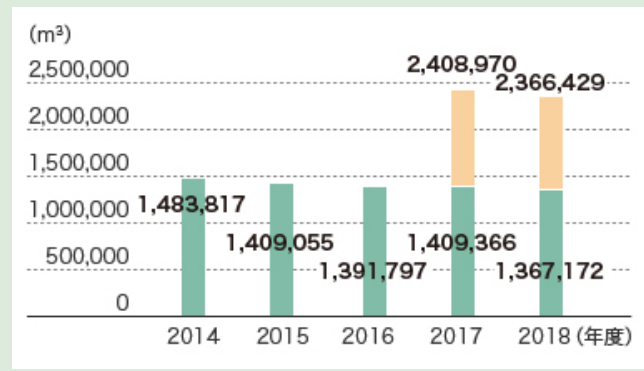
1. 本データの集計対象組織は、当社グループの国内7事業所(京都事業所、長田野事業所、群馬事業所、小田原事業所、株式会社GSユアサ エナジー、株式会社 リチウムエナジー ジャパン、株式会社ジーエス茨城製作所)です。ただし、物流におけるエネルギー使用量とCO₂排出量については、国内物流拠点を含めた株式会社GSユアサの実績値です。
2. 本データの集計対象期間は2014年度から2018年度となっています。ただし、株式会社GSユアサ エナジーについては2017年度から集計しています(グラフの数値が2つある場合、上位の数値が株式会社GSユアサ エナジーを含む実績値を表しています)。なお、すべてのデータは見直しを行った上で情報開示しています。
3. CO₂排出量の算出における電気のCO₂換算係数は、電気事業低炭素社会協議会が公表している2016年度CO₂排出原単位(0.52 t-CO₂/MWh)を使用しています。
4. グラフ中に掲載している原単位は、次式によって算出しています。
 - (1) 物流におけるエネルギー原単位 (L/トンキロ) = エネルギー使用量 / 貨物輸送量
 - (2) 生産におけるCO₂排出原単位 (g-CO₂/Wh) = CO₂排出量 / 生産電池の容量
 - (3) 2003年度比排水削減率 (%) = { (2003年度排水量 - 排水量) / 2003年度排水量 } × 100
 - (4) 再資源化率 (%) = (再資源化量 / 廃棄物排出量) × 100
 - (5) 鉛スクラップ率 (%) = (廃極板および廃電池排出量 (鉛) / 鉛使用量) × 100

INPUT

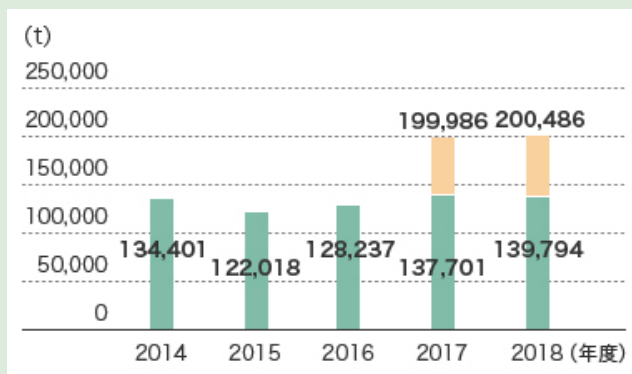
■ 生産におけるエネルギー使用量



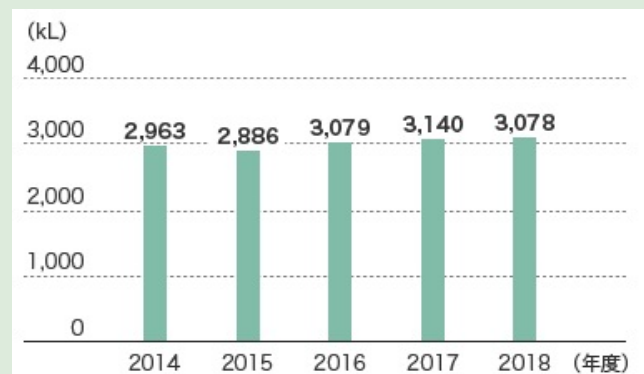
■ 水使用量



■ 主要材料使用量

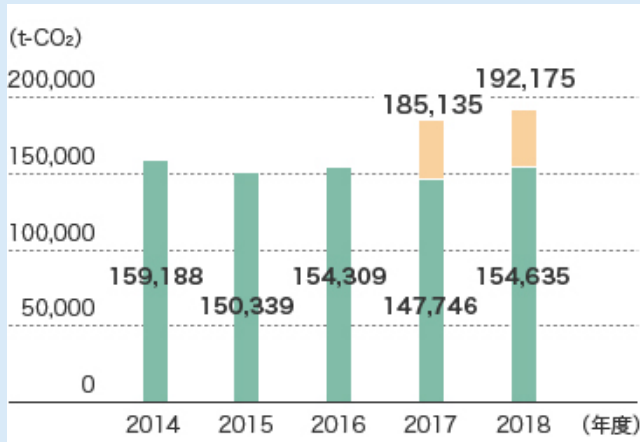


■ 物流におけるエネルギー使用量

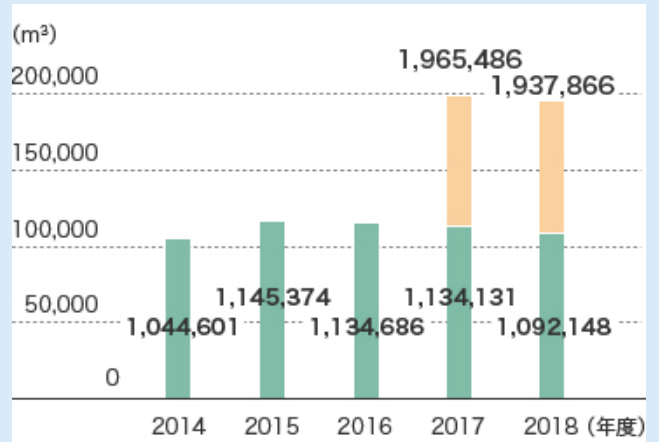


OUTPUT

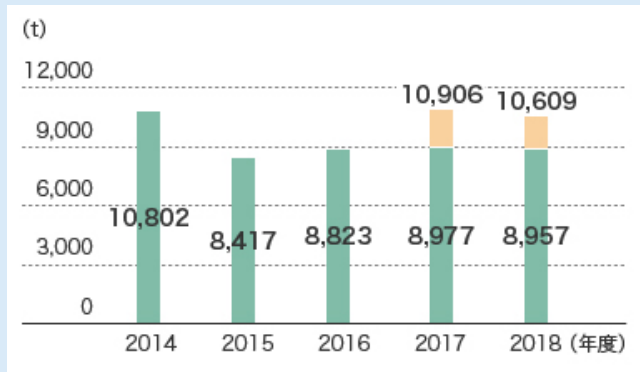
■ 生産におけるCO₂排出量



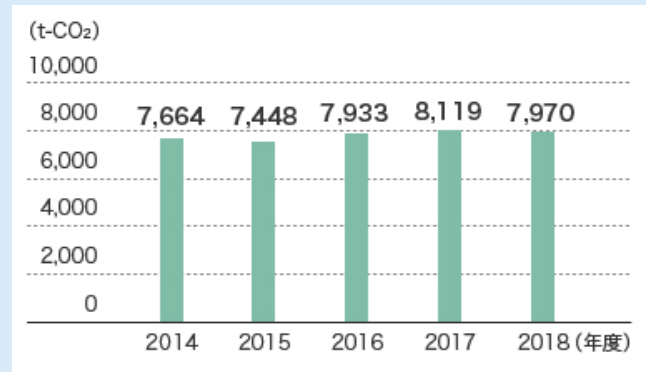
■ 排水量



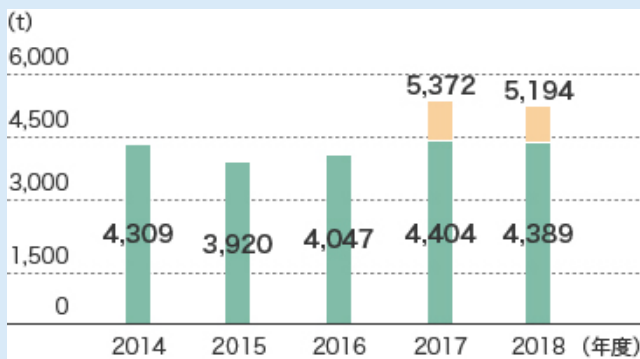
■ 廃棄物排出量



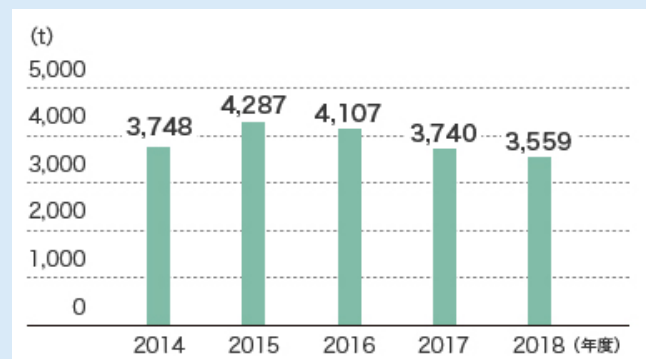
■ 物流におけるCO₂排出量



■ 廃極板および廃電池排出量(鉛)



■ 広域処理における再資源化量



※本グラフの値を見直した結果、「生産におけるエネルギー使用量」と「生産におけるCO₂排出量」の実績値を当初の公表値から修正しています。

環境会計

環境会計情報に係る集計範囲

対象組織 国内7事業所（京都事務所、長田野事務所、小田原事務所、群馬事務所、株式会社GSユアサ エナジー、株式会社リチウムエナジー ジャパン、株式会社ジーエス茨城）

ただし、事業エリア内コストのうち環境に関する設備のコストは構内関連企業の実績を含んでいません。

対象期間 2018年4月1日～2019年3月31日

参 考 環境会計ガイドライン2005年版（環境省発刊）

環境保全コスト（事業活動に応じた分類）

（千円）

分類	主な取り組みの内容	京都事業所	長田野事業所	小田原事業所	群馬事業所	GSユアサ エナジー	リチウムエナジー ジャパン	ジーエス 茨城	合計
事業エリア内コスト （合計）		390,102	379,869	28,811	69,860	169,157	75,747	42,554	1,156,100
内 訳	①公害防止コスト	237,392	269,675	7,066	33,154	145,656	6,674	22,490	722,108
	②地球環境保全コスト	45,757	20,109	12,319	28,418	3,979	8,940	15,267	134,789
	③資源循環コスト	106,953	90,085	9,426	8,287	19,523	60,133	4,797	299,204
上・下流コスト ^{*1}	環境負荷低減のための追加的活動	173	14	14	0	0	0	0	200
管理活動コスト ^{*2}	社員教育・ISO14001維持管理活動	5,318	2,295	474	800	857	1,324	1,376	12,444
研究開発コスト	環境に配慮した研究開発活動	7,190,151	1,595,849	0	0	1,009,000	73,000	0	9,868,000
社会活動コスト	環境に関するボランティア活動	1,760	1,008	310	635	19,760	1,385	303	25,160
環境損傷対応コスト	土壌汚染対策に関する活動	0	158	0	751	220	0	203	1,332
合計		7,587,505	1,979,192	29,608	72,046	1,198,994	151,456	44,436	11,063,236

環境保全対策に伴う経済効果

(千円)

分類	主な項目	金額
水使用効率化に伴う経済効果	水使用量、排水量の削減金額	-20,423 ^{*3}
省エネルギー効果	電気・重油・ガス(都市ガス・LNG・LPG)の削減金額	-288,567 ^{*3}
廃棄物削減効果	産業廃棄物の処理費用削減金額	-84,911 ^{*3}
再資源化効果	廃棄物の再資源化・再利用に貢献した金額	74,020

環境保全効果

分類	主な項目	物量
事業活動に投入する資源に関する環境保全効果	再生水使用量	1,576,980m ³
	水使用削減量	42,541m ^{3*} 3
	エネルギー削減量(原油換算)	-904kL ^{*3}
事業活動から排出する環境負荷および廃棄物に関する環境保全効果	CO ₂ 削減量	-7,040ton-CO ₂ ^{*3}
	排出廃棄物削減量(最終処分量)	-24ton ^{*3}
	排水削減量	27,620m ^{3*} 3
	排出廃棄物のリサイクル量	9,913ton
	リサイクル率 ^{*4}	93%
	[水質] 排出鉛量	37kg
	[大気] 排出鉛量	126kg

*1 上・下流コストには、コンサルタント費用と容器包装リサイクル法による再商品化委託料を集計しています。

*2 管理活動コストには、社員教育・ISO14001の維持管理費用のほか、情報開示に関する費用を含んでいます。

*3 前年度に対する削減値(マイナス値は増加値)を表しています。

*4 リサイクル率=(リサイクル量/廃棄物排出量)×100

環境負荷低減への取り組み

製造段階だけでなく、製品ライフサイクルを考慮した環境負荷の低減に努めています。

開発・設計

製品環境適合設計の運用

当社グループの製品は、調達、製造、輸送、使用、廃棄の各段階において、環境に何らかの影響を及ぼしています。そのために、当社グループでは、製品ライフサイクルにおいて発生する資源の消費、温室効果ガスや廃棄物の排出などの環境負荷を低減することを目的に、製品の使用材料を考慮した設計、3Rを考慮した設計、分解の容易性を考慮した設計、表示を考慮した設計、省エネルギーを考慮した設計、梱包材を考慮した設計などに対する指針を示した「製品環境適合設計ガイドライン」に基づく製品の設計に取り組んでいます。当社グループは、本ガイドラインを活用することによって、製品の性能を維持・改善しながら、環境適合設計による環境配慮製品の開発・設計を推進しています。

製品の環境影響評価の実施

製品の設計における環境アセスメントでは、設計部門は設計標準に従った製品の設計を行い、製品ライフサイクルの各段階における環境影響評価に対して、DR（デザイン・レビュー）会議で製品の環境適合性を審査します。審査結果が環境影響評価基準を満たさない場合には、設計標準を見直して製品の設計を再度行います。その際、設計部門だけでなく、エンジニアリング、マーケティング、購買、品質、環境などに関係する部門の適切な専門性を活用することによって、環境適合設計の効果が最大限に発揮できるようなコミュニケーションを図っています。

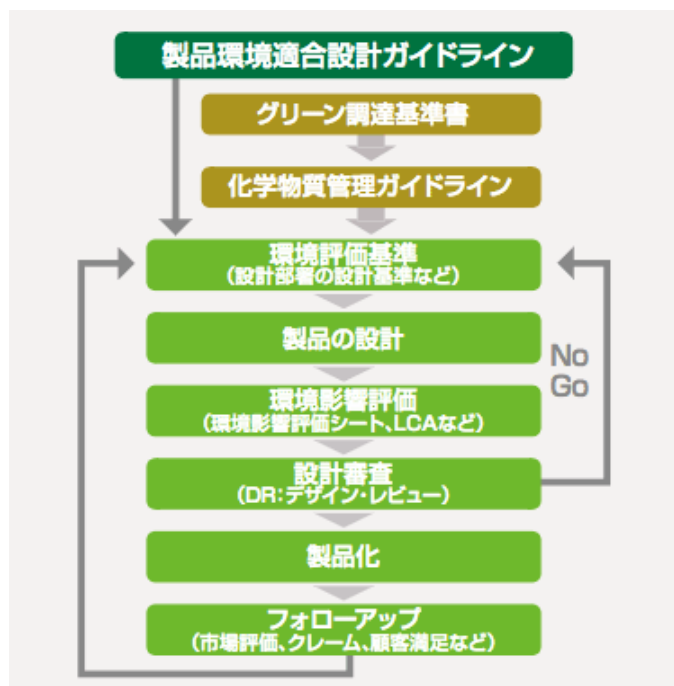
■ 環境アセスメント項目

- | | |
|------------|---------------|
| 1. 省エネルギー | 2. 減容化 |
| 3. リサイクル性 | 4. 分解性 |
| 5. 分別処理容易化 | 6. 安全性と環境保全 |
| 7. 材料選択 | 8. メンテナンス性 |
| 9. エネルギー効率 | 10. 再使用（寿命延長） |

流通している製品への情報の反映

市場に流通している当社グループの製品に対するお客様からのご要望などの重要な情報についても、現行製品の設計変更や将来の新製品の設計に活用することによって、環境適合設計の価値を高めています。製品のアフターサービス・返品・クレームなどに係るステークホルダーからの情報を、製品の環境パフォーマンスを向上する貴重な資源として活かす運用を推進しています。

■ 環境アセスメントフロー



製品含有化学物質管理




当社グループでは、製品に含まれる化学物質の管理基準を明確に示した「化学物質管理ガイドライン（製品含有）」をもとに、環境負荷の少ない製品を提供する取り組みを行っています。本ガイドラインは、当社グループのグリーン調達基準書に規定している納入材料に含まれる化学物質調査の一環として実施していくもので、当社グループが生産および販売する製品を構成する主材料、副材料、部品などに含有される化学物質の中で、対策を講じるべき物質を禁止物質ランクと管理物質ランクに分類するなど、製品含有化学物質の把握と管理を行うことを目的としています。当社グループは、主材料、副材料、部品などを納入しているサプライヤー様とともに、本ガイドライン対象物質の把握と管理を徹底することによって、製品の環境品質の向上に取り組んでいます。

環境配慮製品の普及促進

当社グループでは、地球温暖化の抑制に貢献する製品を環境配慮製品と定義して、当該製品の開発および普及を促進する活動に取り組んでいます。

2019年度からは、当社グループの中期経営計画に環境配慮製品に対する販売目標を組み込むことで、お客様に提供する製品を通じた気候変動への対応を事業戦略の一環として取り組んでいます。

■ 当社グループにおける環境配慮製品の事例

対象	説明	対象製品の例
アイドリングストップ車用バッテリー	エンジン停止中のガソリン消費をなくして燃費向上を図るアイドリングストップ車用のバッテリー	
蓄電システム	再生可能エネルギーを有効活用するシステム(パワーコンディショナ、リチウムイオン電池など)	
車載用リチウムイオン電池	温室効果ガス削減に大きく寄与するハイブリッド車用や電気自動車用のバッテリー	

※画像をクリックすると拡大します

製造

化学物質排出量の把握

現在、当社グループの各事業所で使用している化学物質のうち、PRTR制度[※]の報告対象化学物質は下表のとおりです。当社グループでは、有害物質の管理を環境管理活動の中に組み込んで、環境リスクの低減化対策の実施および関連する法令順守状況を定期的に評価しています。

※PRTR制度(化学物質排出移動量届出制度)

「特定化学物質の環境への排出量の把握等および管理の改善の促進に関する法律」により、有害性のある化学物質が、どのような発生源から、どれくらい環境中に排出されたか、あるいは廃棄物に含まれて事業所外に運び出されたかというデータを把握し、集計、公表することが事業者には義務付けられています。PRTR制度の届出対象物質は、第1種指定化学物質（人の健康を損なうおそれまたは動植物の生育に支障を及ぼすおそれのある物質）です。第1種指定化学物質のうち、発がん性があると評価されている物質は、特定第1種指定化学物質として区分されています。

■ PRTR法対象物質の排出移動状況

(kg)

PRTR法対象物質	事業所	大気への排出	公共用水域への排出	下水道への移動	当該事業所の外への移動	合計
鉛化合物*	京都	60.0	-	6.3	28,000.0	28,066.3
	長田野	21.0	-	14.0	3,600.0	3,635.0
	群馬	15.0	3.9	-	9.9	28.8
	GSユアサ エナジー	14.0	8.4	-	3,300.0	3,322.4
	茨城	16.0	4.7	-	40.0	60.7
砒素および その無機化合物*	京都	2.7	-	0.8	3.2	6.7
	群馬	-	1.5	-	0.0	1.5
	GSユアサ エナジー	-	-	-	0.3	0.3
アンチモンおよび その化合物	京都	9.0	-	1.5	33.0	43.5
	長田野	0.0	-	2.3	0.0	2.3
	群馬	0.0	0.6	-	0.0	0.6
	GSユアサ エナジー	-	-	-	0.2	0.2
マンガンおよび その化合物	京都	0.0	-	0.0	2,700.0	2,700.0
	長田野	1.5	-	0.0	0.1	1.6
	リチウムエナジー ジャパン	-	-	0.0	54,000.0	54,000.0
ニッケル化合物*	京都	0.0	-	0.0	44.0	44.0
	長田野	0.7	-	0.0	0.1	0.8
	小田原	0.0	-	0.0	0.0	0.0
	リチウムエナジー ジャパン	0.0	-	0.0	4,100.0	4,100.0
コバルトおよび その化合物	京都	0.0	-	0.0	184.0	184.0
	長田野	0.0	-	0.0	0.1	0.1
	リチウムエナジー ジャパン	0.0	-	0.0	4,100.0	4,100.0
ジクロロメタン	京都	0.4	-	0.0	300.0	300.4
	茨城	1,900.0	0.0	-	34.0	1,934.0
カドミウムおよび その化合物*	小田原	0.0	-	0.0	0.0	0.0
トリエチレン テトラミン	茨城	0.0	0.0	-	0.0	0.0
合計		2,040.3	19.1	24.9	100,448.9	102,533.2

- : 対象外

* : 特定第1種指定化学物質製造

廃棄物処理の効率化

当社グループでは、循環型社会の実現に貢献するため、廃棄物の削減や再資源化に対する取り組みを推進しています。特に、主力製品である鉛蓄電池の生産工程から排出される鉛を含む水については、廃棄物処理だけではなく、排水処理の観点でも重要なテーマとして取り組んでいます。

京都事業所では、効果的な排水処理を実現するために、2018年度に工程排水処理能力を強化しました。排水処理前に廃鉛を回収できる高速沈殿装置を導入したことにより、排水処理場に送水される工程排水中の鉛濃度を1/150程度まで低減しています。この結果、排水処理場で使用する薬剤使用量が削減されるため、処理後に発生する鉛含有汚泥の排出量は設備導入前に比べて約15%削減できると見込んでいます。



導入した高速沈殿装置

生産活動に伴う温室効果ガスの削減

当社グループの国内事業所では、照明装置のLED化や啓発活動による省エネルギー活動の推進とともに、生産性改善活動(設備使用条件の変更、設備更新など)によるエネルギー利用の効率化を図っています。特に、当社グループの電力使用量の大半を占める蓄電池の充電工程における省電力化は、温室効果ガス排出量の削減に関する重要課題として各事業所で取り組んでいます。

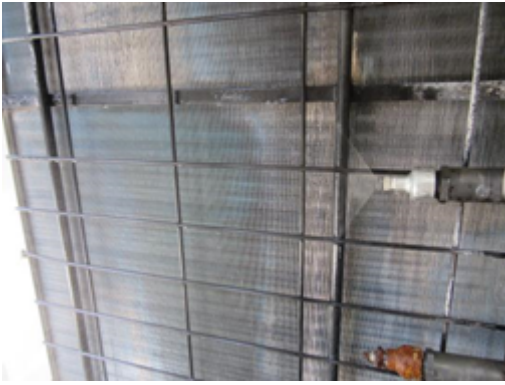
京都事業所では、2018年度に充電プロセスの改善や充電装置の改良に取り組んだ結果、約292tのCO₂排出量の削減効果を実現しています。

当社グループでは、本来業務の効率化を図ることによって、出来る限りエネルギー利用のムダを低減し、エネルギー利用に伴う温室効果ガス排出量を削減する取り組みを推進しています。

生産工程における水使用量の削減

当社グループの国内事業所では、水の循環利用や節水などに取り組むことによって、水の効率的な利用を推進しています。

蓄電池工場では、充電工程で多量に使用する冷却水の循環利用を継続的に取り組んでいます。また、特殊電池工場では、空調設備で使用する冷却水についても節水活動を実施しています。除湿機用室外機の水冷装置における散水用ノズルを噴霧式に切り替えることによって、必要な冷却性能を維持した上で、約450m³/月(夏季)の節水効果を実現しています。



散水用ノズル(噴霧式)

輸送

物流に係るエネルギー使用量の削減

当社グループでは、製品ライフサイクルにおける環境負荷低減の取り組みの一つとして、貨物輸送における省エネルギー活動を推進しています。

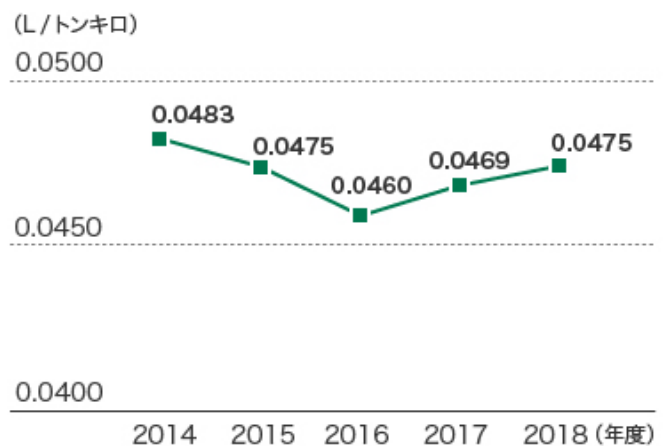
物流に係る貨物輸送量、エネルギー使用量、CO₂排出量などを把握するしくみを構築して、定期的に専門委員会でエネルギー削減計画の達成状況を管理するなどの組織的な省エネルギー活動に取り組み、物流拠点の統合による拠点間輸送量の削減、トラックから鉄道コンテナなどへ輸送方式を変更するモーダルシフトなどの対策を実施しています。

このような活動により、2018年度のエネルギー使用原単位を2013年度比7.2%削減することができました。今後も、継続的な物流分野におけるエネルギーの効率化を図り、環境負荷と物流コストを低減する活動を推進していきます。

エコレールマーク制度の運用

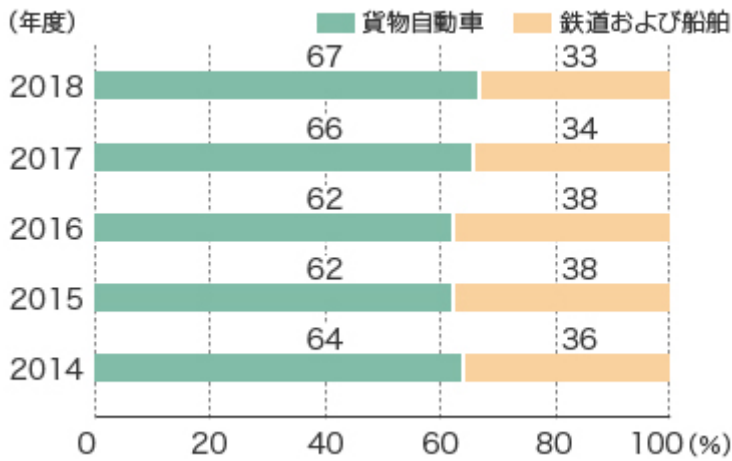
「エコレールマーク制度」とは、製品などの流過程において、環境負荷の少ない鉄道貨物輸送を積極的に活用している企業または商品に対する認定制度のことです。当社グループは公益社団法人鉄道貨物協会から認定企業の指定を受け、7シリーズの自動車用・バイク用電池の商品認定を受けています。この認定商品をお客様にご購入いただくことで、お客様と企業が一体となって環境負荷の低減対策に参加する取り組みを推進しています。当社グループは、鉄道貨物輸送の拡大により、環境に配慮した物流を推進していきます。

■ 貨物輸送量当たりのエネルギー使用量（原油換算量）



トンキロは貨物輸送量の単位であり、1トンの貨物を1キロメートル運んだ場合は1トンキロとなります。

■ 貨物輸送量の比率



当社グループのエコレール認定商品の一例

再資源化

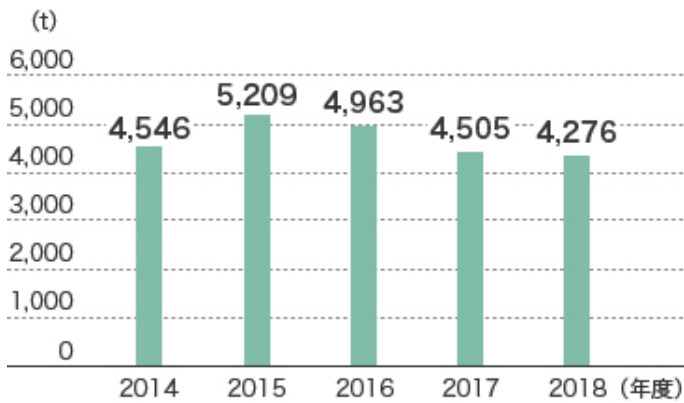
産業用電池に係る広域認定制度の活用

広域認定制度とは、製品の製造事業者が市場で使用済みとなった製品の再生や廃棄処理に自ら関与することで、効率的な再生利用や処理・再生しやすい製品設計へのフィードバックを推進するとともに廃棄物の適正な処理を確保することを目的とした廃棄物処理法上の制度です。

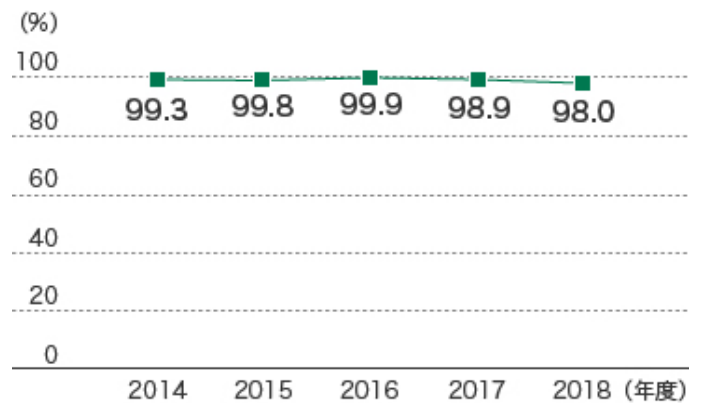
当社グループは、2008年1月に産業用電池および電源装置に係る広域認定を環境省より取得し、2009年1月以降の受注物件より当該認定による再資源化システムの運用を本格的に開始しました。運用開始後も、対象製品の拡大や運用ルールの見直しなどの改善を実施して、使用済み産業用電池を確実に適正に処理できるしくみを確立しています。その結果、現在では当社グループで回収した使用済み産業用電池の大多数は広域認定制度を活用して処理されています。

今後も、顧客サービスの向上と使用済み製品の再資源化および適正処理に向けて、より効果的な広域認定制度の運用を推進していきます。

■ 広域処理実績量の推移（産業用電池、電源装置）



■ 広域処理適用率の推移（産業用電池、電源装置）



広域認定処理に係る運用管理の徹底

当社グループは、使用済みとなった当社製品に係る回収・再資源化システムを構築・運用することが、循環型社会を推進するために重要であると考えています。そのため、当社グループでは、2010年3月に発行した「産業廃棄物に係る広域認定制度運用ガイドライン」をもとに、広域認定制度を活用した使用済み製品の適正処理および再資源化の推進に係る取り組みを強化しています。本ガイドラインは、当社グループが広域認定制度を活用した使用済み製品の適正処理を運用するための基本的な考え方を示した指針です。本ガイドラインでは、当社グループが広域認定制度を運用する上において重要な3つの要素であると考えている①広域認定制度の概要、②広域認定における処理工程、③運用体制の確立と運用管理に対する具体的な管理手法を明確にしています。また、広域認定に係る廃棄物処理業者の処理状況を確認する場合に使用するチェックリストなどの実践で活用するためのツールや事例集を本ガイドラインに掲載することによって、広域認定処理に係る適正な運用管理の徹底を図っています。

製品に使用する再生鉛の利用率向上

当社グループでは、主力製品である鉛蓄電池の主材料として使用する鉛の再生利用率を向上する活動に取り組んでいます。

2019年度からは、当社グループの中期経営計画に鉛蓄電池に含まれる鉛の再生利用率に対する目標を組み込むことで、事業戦略と一体となった循環型社会の実現に貢献する取り組みを推進しています。

当社グループでは、拡大生産者責任に基づくリサイクルシステムの構築と運用により、お客様などで使用済みとなった当社製品の再資源化に取り組んできました。今後は、当社製品における再生材料の利用促進に向けた取り組みについても強化し、循環型社会へのさらなる貢献を目指しています。

地域社会との共生

Building Better Relationships with Local Communities

事業活動を通じた地域社会への貢献を推進しています。

環境への貢献

太陽光発電の安定供給に貢献

北海道にある釧路町トリトウシ原野太陽光発電所では、当社グループ製のリチウムイオン電池を利用した太陽光発電システムを運用しています。

太陽光発電は自然条件(日照時間、気温など)の変化によって発電電力に急激な変動が生じることがあり、大量に太陽光発電の電力を電力系統へ接続した場合に系統電力の品質(電圧、周波数)を低下させる可能性があります。そのため、太陽光発電所を電力系統に接続する際には、発電電力の変動を平準化する蓄電池が必要となります。

人口増加や経済成長などによる世界のエネルギー需要の増加に伴い、限りある化石燃料に代わって再生可能エネルギーの利用拡大が求められています。太陽光発電や風力発電によるエネルギーを有効利用するためには、出力変動を安定化する蓄電システムが不可欠です。当社グループは、今後も高性能なりチウムイオン電池の発電分野への活用を促進して、再生可能エネルギーを利用した持続可能な地域社会の実現に貢献することを目指していきます。



産業用リチウムイオン電池
モジュール「LIM50EN」シリーズ



釧路町トリトウシ原野
太陽光発電所全景

温室効果ガスの観測精度の向上

2018年10月に種子島宇宙センターから打ち上げられた温室効果ガス観測技術衛星「いぶき2号」には、当社グループ製の宇宙用リチウムイオン電池が搭載されています。「いぶき2号」は、世界中の二酸化炭素やメタンなどの温室効果ガスを正確かつ均一に観測することをミッションとしており、さらなる観測精度向上を目指しています。

多くの国では、気候変動に関する国際的な枠組みであるパリ協定に基づき、自国の温室効果ガス排出量を報告することが義務付けられています。そのため、地球全体を均一に測定可能な「いぶき2号」から得られたデータは、各国の温室効果ガス排出量の正確性を確認する科学的根拠としての役割が期待されています※。

今後も、当社グループの製品は、地球温暖化の抑制に向けた国際的な取り組みに貢献していきます。

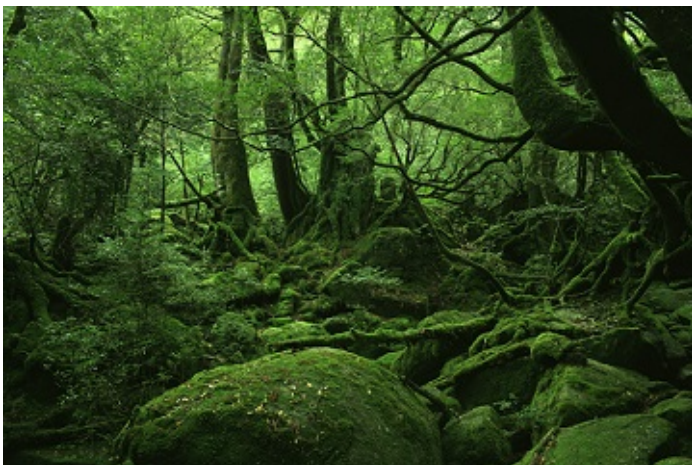
※出典元：宇宙航空研究開発機構(JAXA)

屋久島環境文化財団の活動の支援

株式会社 ジーエス・ユアサ バッテリー（以下、GYB）では、地域の環境保全への取り組みのひとつとして、屋久島環境文化財団への協賛を行っています。屋久島は1993年に日本の世界遺産第1号として登録された日本を代表する自然であり、当財団は人類の財産である屋久島の豊かな自然環境を保護するための活動や自然と人が共生する地域づくりのための事業を行っています。

また、GYBは、2009年度より継続的に実施している「小学生ECO絵画コンクール」の金賞受賞者に屋久島への家族旅行を賞品として提供しており、小学生が屋久島の大自然のすばらしさを体験する活動も展開しています。当社グループは、当財団への支援を通じて、「生命の島」とも呼ばれる屋久島の自然保護への貢献や子供たちの環境教育を推進しています。

➤ [屋久島環境文化財団ホームページはこちらをご覧ください](#)



屋久島の豊かな自然環境

(写真提供：公益財団法人 屋久島環境文化財団)

人づくりへの貢献

GSユアサ小学生ECO絵画コンクールの開催

株式会社 ジーエス・ユアサ バッテリーでは、次世代を担う子どもたちが地球環境に対する考えを絵画という表現方法を通じて人に伝える「GSユアサ小学生ECO絵画コンクール」を2009年度より開催しています。

子どもと家族が一緒になって「環境とは何か」を考えるきっかけとなることを目指し、今後も継続して同コンクールを開催していく予定です。

➤ [「GSユアサ小学生ECO絵画コンクール」の詳細はこちらをご参照ください](#)

小学生への環境学習事業の開催

当社グループの京都事業所では、地域の商工会議所と協力して、京都市内の小学生を対象に環境をテーマとした授業を実施しています。本活動は、企業の環境技術を紹介する授業を小学校で行うことによって、小学生の環境問題に対する認識を深めることを目的としています。

2018年度は、「太陽光発電と蓄電池の役割」というテーマで、太陽光発電のしくみや環境への貢献について小学生に説明しました。身近な太陽光発電システムの導入例の紹介や蓄電池と組み合わせた太陽光パネルを用いた体験実習により、再生可能エネルギーである太陽エネルギーから電気を作るプロセスなどを学習しています。

当社グループは、今後も、未来を担う子供たちに対して環境保全に関する啓発活動を推進していきます。



太陽光発電システムの学習風景



太陽電池を用いた実習風景

劇団四季「こころの劇場」の支援

当社グループは、劇団四季と一般財団法人舞台芸術センターが主催する「こころの劇場」の京都府公演（全12公演）に協賛しています。「こころの劇場」は、生命の大切さ、人を思いやる心、信じあう喜びなど、人が生きていく上で大切なものを、舞台を通じて子どもたちの心に語りかけることを目的に、日本全国の子どもたちを学校単位で劇場に無料招待しています。

2018年9月に京都で上演されたミュージカル『魔法をすてたマジョリン』では、全8公演(午前と午後の2回を4日間)が行われ、京都市内のたくさん子どもたちが観劇を楽しみました。当社グループではそのうち4公演(2日間)で従業員8名がボランティアとして参加し、当日の受付や会場誘導などの業務を支援しました。

今後も、劇団四季「こころの劇場」への協賛を通じて、未来を担う子どもたちに時を経ても変わらない大切なものを届ける活動を支援していきます。



劇団四季ファミリーミュージカル『魔法をすてたマジョリン』より
(撮影：荒井健)



運営ボランティアの様子

社会への貢献

宇宙開発利用に関する研究開発への貢献

当社グループの宇宙用リチウムイオン電池は、国際宇宙ステーション（ISS）に採用されています。ISSは、地上から約400km上空に建設された有人実験施設で、世界各国が協力して利用しています。

ISSの主な目的は、宇宙空間におけるさまざまな実験・研究による科学や技術の進歩であり、広範な分野にわたる研究・実験・観測の成果は、豊かな暮らしや産業競争力の向上などにつながります。宇宙開発を大きく前進させるための重要な施設であると同時に、世界各国が最新技術を提供して協同で運営する国際協力と平和のシンボルでもあります※。

ISSでは、生命維持のためのシステムをはじめとして、実験や観測装置などのすべての機器の電力が太陽光発電によって供給されています。しかしながら、1日に16回、地球の影に入るたびに発電が停止することになり、この間の電力は昼間に充電した当社グループの宇宙用リチウムイオン電池から供給されています。

当社グループは、今後も、高性能リチウムイオン電池の開発・製造を通じて、持続可能な社会の実現に向けた科学・技術の発展に貢献していきます。

※出典元：宇宙航空研究開発機構(JAXA)

京都事業所周辺の交通安全

当社グループの京都事業所では、長年にわたって小学生の通学時の見守り活動を実施しています。交通事故を防止するため、小学生の登下校時には通学路での業務用車の通行を抑制するとともに児童への保護誘導を行うことによって、通学路の安全確保に努めています。また、2018年度に発生した大阪府北部を震源とする地震によるブロック塀の倒壊事故を受けて、事業所敷地を囲むブロック壁の安全点検を実施しました。点検結果に基づき、通学路に接する全長840mのブロック壁をフェンスに改修することで、通学児童や近隣住民の通行における安全性向上を図っています。当社グループは、今後も地域社会の健全な暮らしにつながる活動を推進していきます。



外壁改修工事前



外壁改修工事後

栄養不良状態にある乳幼児数を削減する地域社会プログラムへの参画

インドネシアでは、生後0～59ヶ月の乳幼児のうち栄養不良状態にある割合が14.4%を占めています。また、インドネシアのカラワン県地域では、栄養失調を経験している生後0～59ヶ月の乳幼児が270人も存在しています。

カラワン県に所在する海外グループ会社のPT GS Battery Indonesia (以下、PTGS)では、このような地域の社会課題への解決に貢献するために、栄養失調を経験している乳幼児の削減プログラムに2015年度から参画しています。本活動は乳幼児が十分に栄養を与えられるまで栄養補給食品を毎月提供していくもので、2018年度は2人の栄養失調の乳幼児に栄養補給食品を提供しました。

PTGSは、今後も、疾病や発育障害に影響を及ぼす可能性のある栄養不良状態の乳幼児を削減するプログラムに継続的な支援活動を実施していきます。

NPO団体との連携による海洋環境保全への取り組み

オーストラリアはマリンスポーツや釣りなどのレジャーが盛んな国ですが、近年は不法投棄などによる海洋汚染が深刻化しています。

同国に所在する海外グループ会社のCentury Yuasa Batteries Pty Ltd. (以下、CYBA)では、重要なマーケットの一つであるマリン市場の持続可能性を確保するために、CYBAが販売したマリン用蓄電池1個につき1豪ドルを深刻な海洋環境を保全する活動を行うNPO団体に寄付する活動を実施しています。CYBAが支出した寄付金は、当該NPOの活動を支えるほか、地域社会に対する環境教育などの用途にも活用されています。

CYBAは、NPO団体などの幅広いステークホルダーと連携することで、地域の社会課題の解決に向けた支援を推進しています。

タイ拠点における地域貢献活動

タイ国に所在する海外グループ会社では、地域に密着した企業として、地域社会への貢献に向けた活動を推進しています。

Siam GS Battery Co. Ltd. (以下、SGS)では、6月から始まる雨季の前に事業所周辺地域を流れる河川を治水するための浚渫工事を行いました。タイ国の雨季の期間には短時間に多くの降雨量が発生して河川が氾濫することもあるため、当該地域に居住する従業員の生活や地域社会の経済に悪影響を及ぼす可能性のある状況を改善しました。

Siam GS Sales Co., Ltd. (以下、SGSS)では、地元警察と協力して安全運転を呼びかけるイベントを毎年実施しています。タイ国の交通事故による死亡者は、人口10万人当たり32.7人とアジア地域では最悪の水準(2016年度統計)であり、大きな社会問題となっています。SGSSは、自動車産業に携わる企業として、人々が安全に暮らせる地域社会への実現に向けた活動に取り組んでいます。

GS Yuasa Siam Industry Ltd.(以下、GYSI)では、近隣の小学校や寺院に対する清掃および寄付、LED化で不要となった蛍光灯の小学校への提供、学生向け工場見学会の開催、工業団地でのマラソン大会への協賛など、地域との交流を重視した活動に取り組んできました。また、事業活動に伴って環境中に排出される有害物質(鉛)の監視測定結果を地域代表者に定期的に報告するなど、地域社会との円滑なコミュニケーションを図っています。このような活動がタイ国政府から評価され、CSR-DIW Award^{※1}の受賞やタイランド・ブランド・マーク^{※2}の認定に繋がりました。

※1 CSR-DIW Award：タイ工業省工場局(DIW)が持続可能な発展や地域社会に貢献する優れた事業活動を推進する企業に対して贈る賞

※2 タイランド・ブランド・マーク：タイ国内で作られている製品・サービスの品質だけでなく、生産過程の信頼性や安全性、環境配慮、社会的責任などについても保証するマークで、一定基準に適合した企業をタイ国政府商務省国際貿易振興局が認定する制度



河川の浚渫工事 (SGS)



安全運転を呼びかけるイベント (SGSS)



CSR-DIW Awardの盾 (GYSI)

サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進

Ensuring Social Responsibility within Our Supply Chain

当社グループは、サプライチェーンとともに、持続可能な社会の実現に貢献します。

調達基本方針

主な調達活動

当社グループでは、サプライヤー様に対して、コンプライアンスやCSRに関する教育ならびに指導、製品含有化学物質管理や紛争鉱物対応などに係る各種調査、グリーン調達などに取り組んでいます。また、サプライヤー様の業績向上に向けた改善支援活動、品質改善に係る勉強会や講演の開催なども実施しています。

サプライチェーンを通じたより良いパートナーシップにより、サプライヤー様と当社グループの相互の業績向上や事業リスク低減を推進しています。

調達基本方針

サプライヤー様との相互理解と信頼関係に基づく、より良いパートナーシップの構築に努め、
サプライヤー様と当社グループの業績向上を目指します。

生産状況説明会の開催

当社グループでは、主要なサプライヤー様に対して、当社グループの経営方針、年度事業方針、調達基本方針などを理解いただき、相互理解を深めて信頼関係を強化するために、経営陣による生産状況説明会ならびに懇親会を毎年開催しています。また、前年度の取引実績において、品質、価格、納入、社会貢献に特別に優れた貢献をいただいたサプライヤー様を表彰しています。



生産状況説明会の開催



サプライヤー様に対する表彰

CSR調達

CSR調達に対する考え方

当社グループでは、強制労働、児童労働、環境破壊などが国際的な社会課題として認識されている状況の中で資材調達を行うにあたっては、従来の品質、性能、価格、納期などの納入条件のみならず、CSR要素(人権、労働環境、地球環境など)を重視した調達活動を推進することが重要だと考えています。そのために、自社だけでCSRに取り組むのではなく、サプライヤー様と協力して社会課題に対応するCSR調達(持続可能性に配慮した責任ある調達活動)を推進しています。

当社グループは、CSR調達に取り組むことにより、当社グループとサプライヤー様の双方の企業価値が向上し、サプライチェーン全体の相互繁栄が実現できるものと考えています。

CSR調達の取り組み

当社グループでは、CSR調達の観点からサプライヤー様に取り組んでいただきたい事項を明示した「CSR調達ガイドライン」を2018年度に発行し、サプライヤー様に配布しています。本ガイドラインは、当社グループとサプライヤー様とのパートナーシップに基づく持続可能な社会への貢献を通じて、相互の業績向上や事業持続性に影響をおよぼす可能性のある事業リスクを低減することを目的に作成しています。サプライヤー様に対する説明会などを通じて、本ガイドラインの主旨を理解していただいた上で、サプライチェーン全体に本ガイドラインを周知しています。

また、当社グループのサプライチェーンにおける重要なCSR課題を特定するために、サプライヤー様のCSR対応状況を把握する調査を実施しています。サプライヤー様に配布した、企業倫理、人権、労働環境、環境保全、製品安全、情報セキュリティなどのテーマに対するアンケート調査票の回答結果を回収し、疑義のある回答内容については個別に再確認を行っています。2018年度は、367社(国内：125、海外：242)のサプライヤー様に対して調査を行っています。今後、アンケート調査結果を分析・評価した上で、重要なサプライチェーンCSR課題を決定し、必要な対応策を講じていきます。

➤ [CSR調達ガイドラインの内容については、こちらをご参照ください](#)



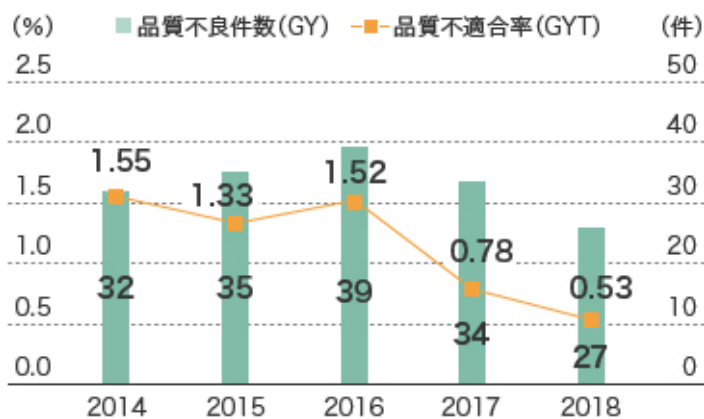
CSR調達説明会の開催

品質と安全衛生の確保

当社グループでは、部品および原材料の供給元であるサプライヤー様を含めた品質向上活動と安全衛生活動を推進するために、必要に応じて、サプライヤー様のニーズを反映した品質指導や安全衛生パトロールなどを実施しています。品質向上活動については、当社グループへの納入品に対する品質不適合の目標値や実績値をサプライヤー様と共有した上で、品質改善にともに取り組んでいます。また、サプライヤー様への品質改善講習会やサプライヤー様相互の工場見学による品質改善交流会などを開催することによって、サプライヤー様における品質改善活動を支援しています。

このような活動により、サプライチェーンを通じた強力なパートナーシップを構築し、お客様で使用する製品の品質とサプライヤー様の安全衛生を確保する取り組みを推進しています。

■ 納入品に対する品質不適合状況の推移



GY：株式会社 GSユアサ

GYT：株式会社 ジーエス・ユアサ テクノロジー



サプライヤー様に対する品質指導



品質改善講習会の開催

紛争鉱物(コンフリクト・ミネラル) 問題への対応

紛争鉱物（コンフリクト・ミネラル）とは、世界の一部の紛争地域で採掘された鉱物資源をいいます。このような紛争地域では、武装勢力による住民の虐殺、拉致、暴行、児童兵の徴用などの非人道的行為が行われるなどの社会問題が発生しており、当該地域で採掘される鉱物は武装勢力の大きな資金源となっています。

当社グループでは、このような紛争鉱物問題に対応することがグローバルなサプライチェーンにおいて重要であると認識し、サプライヤー様をはじめとするさまざまなステークホルダーと連携して人権侵害への加担を回避する活動を推進しています。そのために、紛争鉱物問題に対応する方針を策定し、当該方針に基づいた運用管理を徹底することにより、紛争鉱物を使用しない責任ある鉱物調達を推進しています。

紛争鉱物に関する対応方針

GS YUASA は、コンゴ民主共和国及び周辺諸国（以下、コンゴ周辺諸国）において武装勢力が行う武力紛争と、これに伴う人権侵害等反社会的行為への加担を回避し、責任ある鉱物調達を実現するため、以下の取り組みを推進いたします。

1. GS YUASA CSR 方針に従い、コンゴ周辺諸国からの直接または間接的な紛争鉱物（上記の加担に繋がる金、スズ、タンタル、タングステン）の調達および使用の回避に努めます。
2. グループ各社及びそのサプライヤー様が紛争鉱物を調達、使用していると判明した場合は、関係各社と連携してその回避に向けた活動に取り組みます。
3. 自主もしくは顧客の調査要請に基づき紛争鉱物の使用調査を継続的に実施し、グループ各社及びそのサプライヤー様より購入元情報（スメルター名称等）が不誠実に開示されず、紛争鉱物を調達、使用していることが懸念された場合は、情報の解明に取り組みます。

グリーン調達活動

国内グループ会社では、「グリーン調達基準書」に基づいて、以下の事項をサプライヤー様に要請しています。

サプライヤー様への要請事項

- ①環境マネジメントシステムの運用
- ②納入品に含まれる化学物質調査
- ③木材伐採の合法性確認
- ④CO₂排出量の把握および削減への取り組み

②については、EU規制(REACH規則、RoHS指令など)に代表される各国法規制に対応した「化学物質管理ガイドライン」に従った環境負荷物質の調査を依頼しており、顧客ニーズで指定される個別の化学物質の調査についても対応要請を行っています。

グリーン調達に係るサプライヤー様への要請事項については、対応状況の確認や監査などにより、その適切性を評価しています。また、新規にサプライヤー様を選定する際には、環境管理に係る取引先選定基準を運用しています。2018年度に新規契約を締結したサプライヤー様はすべて当該基準を満たしています。

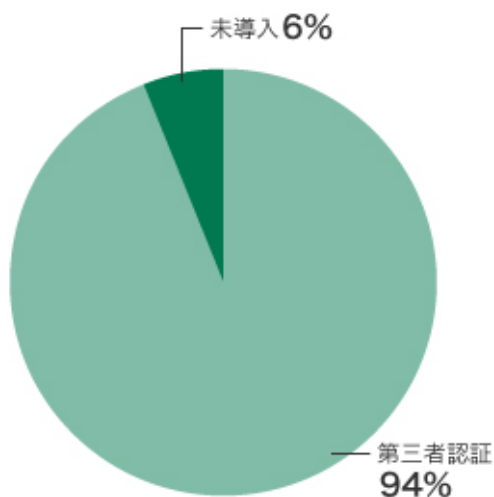
グリーン調達基準に適合した物品を納入できるサプライヤー様と優先的に取り引きすることで、サプライチェーンを含めた環境負荷の低減を推進しています。

■ 環境管理に係る取引先選定基準

- 環境マネジメントシステムの第三者認証を取得している
- 環境マネジメントシステムの第三者認証を取得していないが、認証取得計画を提出している

👉 [グリーン調達の取り組みについては、こちらをご参照ください](#)

■ サプライヤー様における環境マネジメントシステムの導入状況（2018年度、取引金額ベース）



サプライチェーンにおけるCO₂排出量と水使用量の削減

当社グループでは、気候変動や資源枯渇などの環境課題に対応するために、自らの事業活動のみならず、サプライチェーンを通じた環境負荷の低減活動を推進しています。

2018年度は、主要な国内サプライヤー様に対して当社グループ向けの生産に伴う温室効果ガスの排出や水の利用に関する調査を行い、サプライチェーンにおける環境負荷状況を把握しました。また、2019年度からは、サプライヤー様に対して、当社グループ向けの生産に伴うCO₂排出量および水使用量の削減目標（前年度比1%以上削減）の達成に向けた取り組みへの協力を要請しています。

当社グループは、サプライチェーン全体でエネルギーや水などの資源を効率的に利用することによって、事業活動全体における環境保全に取り組んでいます。

CSR調達/グリーン調達

Responsible Procurement/Green Procurement

CSR調達について

GSユアサグループでは、サプライチェーンを通じたより良いパートナーシップにより、購買先様と当社グループの相互の業績向上を目指しています。また、製品、資材、原料などを調達するにあたり、CSR要素(人権、安全衛生、環境、倫理など)に対する活動を購買先様と協働して取り組むCSR調達を推進することが重要であると考えています。サプライチェーン全体でCSRに取り組むことが、持続可能な社会への発展に貢献し、購買先様と当社グループの事業の持続性を確保できるものと考えています。

当社グループは、CSR調達を推進するために、CSR調達の観点から購買先様に取り組んでいただきたい事項(行動基準)を示したCSR調達ガイドラインを発行しました。本ガイドラインは、購買先様と当社グループの事業の持続性に影響を及ぼす可能性のある事業リスクを低減することを目的に作成しています。購買先様に当社グループのCSR調達をご理解いただいた上で、サプライチェーン全体に展開してまいります。

本ガイドラインの行動基準について詳しくは『[CSR調達ガイドライン](#) 』をご確認ください。


グリーン調達について

GSユアサグループでは、当グループ各社内の環境管理活動にとどまらず、当グループ各社の製品製造に必要な原材料・部品の調達におきましても環境に配慮すべく、各購買先様と連携して「グリーン調達」を推進してまいります。

その推進基準たる「グリーン調達基準」をここにご案内いたしますので、各購買先様のご理解と一層のご協力を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。



グリーン調達基準

グリーン調達基準について詳しくは『[グリーン調達基準書](#) 』をご確認ください。

1. GSユアサグループは、環境保全活動を積極的に推進し且つその活動が外部的第三者に認証(*)されている購買先様より、優先的に調達を行います。

以下の認証をグリーン調達基準に採択しております。


- ISO14001
 - KES (環境マネジメントシステム・スタンダード)
 - 上記と同等の環境マネジメントシステムの認証取得 (エコアクション・エコステージ等)
 - ISO14001要求事項適合の自己宣言をGSユアサグループが認証したもの
2. GSユアサグループは、環境負荷が少なくグループで定めた使用禁止物質を含まない原材料・部品を調達します。

各購買先様への環境情報提供のお願い



1. 環境認証取得状況の調査

毎年10月に取得状況を一斉調査させていただきます。

2. 納入品に関する含有化学物質の調査

GSユアサグループ『[化学物質管理ガイドライン](#) 』に基づき、適宜調査させていただきます。

関連書類のご提供

- [グリーン調達基準書](#)  [第7版] 制定2019年7月18日
- [化学物質管理ガイドライン](#)  [第4版] 制定2019年10月1日
- [CO2排出量算出支援エクセルシート](#) (EXCEL)

以下はグリーン調達基準書別紙です。

当社の情報提供依頼の回答の際にダウンロードしてご使用ください。

(EXCEL・WORD形式なので、入力・編集が可能です。)

- 別紙1 「ISO14001又はK E S等認証取得状況調査表」 (EXCEL)
- 別紙2 「環境監査の審査内容及び結果報告書」 (WORD)
- 別紙3 「製品含有化学物質調査票」 (WORD)
- 別紙4 「禁止物質(ランクS)の不使用・不含有証明書、禁止物質(ランクA)の禁止・代替時期報告書」 (EXCEL)
- 別紙5 「取引先環境調査表」 (EXCEL)
- 別表1 「化学物質管理ガイドライン」 (PDF)

社外からの評価

evaluation

当社グループのCSRの取り組みに対するさまざまなステークホルダーの皆さまからの評価結果を掲載いたします。

ESG投資構成銘柄への組み入れ

ESG投資とは、環境(Environment)、社会(Social)、企業統治(Governance)に配慮している企業を選別して行う投資をいいます。財務情報(企業の業績や経営状況など)のみならず、非財務情報(温室効果ガスの排出量削減や化学物質の管理、人権問題への対応や従業員のワークライフ・バランス、コンプライアンスのあり方や社外取締役の独立性など)を用いて、投資における企業価値を評価しています。

MSCI ジャパンESG セレクト・リダース指数

モルガン・スタンレー・キャピタル・インターナショナル (MSCI) 社が開発したインデックスで、ESG評価が高い銘柄を各業種から選定しています。日本の年金積立金の管理や運用を行う年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)が運用しているESG投資で採用したインデックスの一つとなっています。当社は、A評価の格付けを取得して本インデックスに選定されています(7段階評価：AAA、AA、A、BBB、BB、B、C)。

FTSE 4Good Index Series

当社は、ロンドン証券取引所の子会社であるFTSE Russell社によって開発された世界の代表的なESG投資インデックスの構成銘柄に選定されています。「FTSE 4Good Index Series」は、ESGにおけるマネジメントやパフォーマンスに対して、グローバル基準を満たす企業を構成銘柄とした株価指数シリーズです。

FTSE Blossom Japan Index

当社は、ロンドン証券取引所の子会社であるFTSE Russell社が優れたESGへの取り組みを実践している日本企業で構成された株価指数である「FTSE Blossom Japan Index」に選定されています。日本の年金積立金の管理や運用を行う年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)が運用しているESG投資で採用したインデックスの一つとなっています。

CSR評価

東洋経済新報社 CSR企業ランキング

東洋経済新報社が「信頼される会社」を発掘することを目的として行うCSR調査です。当社は、各々の取り組みに対して次の格付けを取得しています(5段階評価：AAA、AA、A、B、C)。

人材活用	環境	企業統治	社会性
AA	AA	AA	AA

EcoVadis社 サステナビリティ評価

EcoVadis社は、サプライヤー企業の持続可能性を評価するための共同プラットフォームを運用しており、環境対応、労働慣行、人権尊重、公正取引、CSR調達などのCSRに関する基準でサプライヤー企業を評価しています。当社は、シルバーランクのCSR認定レベルを取得しています(3段階ランク：ゴールド、シルバー、ブロンズ)。

CSRに関連する取り組みに対する評価、認定、表彰など

DBJ健康格付け

DBJ(日本政策投資銀行)が行う健康格付融資制度では、従業員への健康配慮の取り組みが優れた企業を評価・選定し、その評価に応じて融資条件を設定しています。当社は、2018年に「従業員の健康配慮への取り組みが特に優れている」という最高ランクの格付けを取得しています。

健康経営優良法人(ホワイト500)

健康経営優良法人とは、地域の健康課題に即した活動や日本健康会議が進める健康増進の取り組みをもとに、特に優良な健康経営を実践している法人を経済産業省と日本健康会議が共同で顕彰する制度です。株式会社GSユアサは、本制度の認定企業に選定されています。


くるみんマーク

当社は、次世代の社会を担う子供たちの健全な育成を支援する次世代育成支援対策推進法に基づく子育てサポート企業として認定を受け、認定を受けた企業の証として活用できるくるみんマークを取得しています。

第三者保証

温室効果ガス排出量

当社は、CSR Webコンテンツにて開示する温室効果ガス排出データの信頼性を担保するために第三者検証を依頼し、2018年度における当社グループの温室効果ガス排出量(スコープ1、2)について重要な点を報告していないと認められる事項はないとの検証報告を受けました。

[SGSジャパン株式会社による第三者検証意見書\(2018年度\)](#) 

GRI対照表

GRI Content Index



GRI対照表

本CSRサイトは、企業のサステナビリティ報告に関する国際的なガイドラインであるGRI（Global Reporting Initiative）スタンダードを参考にしています。

GRIスタンダード		開示事項	公開情報	
一般開示項目				
102	組織のプロファイル	102-1	組織の名称	会社概要 [社名]
		102-2	活動、ブランド、製品、サービス	製品情報
		102-3	本社の所在地	会社概要 [本社所在地]
		102-4	事業所の所在地	グループ企業・関連企業
		102-5	所有形態および法人格	株式状況
		102-6	参入市場	有価証券報告書・四半期報告書 [有価証券報告書(PDF) > 事業の内容]
		102-7	組織の規模	会社概要 [従業員数] 事業拠点・所在地 業績ハイライト [売上高] 財務・業績 > チャートジェネレーター [財政状態]
		102-8	従業員およびその他の労働者に関する情報	働きやすい職場環境の提供
		102-9	サプライチェーン	サプライチェーンにおける社会的責任活動の推進
		102-10	組織およびそのサプライチェーンに関する重大な変化	ニュースリリース
		102-11	予防原則または予防的アプローチ	リスク管理
		102-12	外部インシテイク	トップメッセージ [国連グローバルコンパクト] 価値創造プロセス [SDGs] CO₂排出量と水使用量に関する第三者評価の活用 [カーボン・ディスクロージャー・プロジェクト] 企業行動憲章 （日本経済団体連合会）
		102-13	団体の会員資格	-

GRIスタンダード		開示事項		公開情報
戦略	102-14	上級意思決定者の声明	トップメッセージ CSR方針・行動規範	
	102-15	重要なインパクト、リスク、機会	リスク情報	
倫理と真実性	102-16	価値観、理念、行動基準・規範	企業理念 CSR方針・行動規範	
	102-17	倫理に関する助言および懸念のための制度	コンプライアンス推進の基本的な考え方 企業倫理ホットライン	
ガバナンス	102-18	ガバナンス構造	コーポレート・ガバナンス > 考え方および体制	
	102-19	権限移譲	CSR推進体制	
	102-20	経済、環境、社会項目に関する役員レベルの責任	CSR推進体制	
	102-21	経済、環境、社会項目に関するステークホルダーとの協議	IRカレンダー	
	102-22	最高ガバナンス機関およびその委員会の構成	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 機関構成・組織運営等に係る事項 / 業務執行、監査・監督、指名、報酬決定等の機能に係る事項]	
	102-23	最高ガバナンス機関の議長	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 機関構成・組織運営等に係る事項]	
	102-24	最高ガバナンス機関の指名と選出	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > コーポレート・ガバナンス・コード の各原則に基づく開示]	
	102-25	利益相反	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > コーポレート・ガバナンス・コード の各原則に基づく開示 / 資本構成 / 機関構成・組織運営等に係る事項]	
	102-26	目的、価値観、戦略の設定における最高ガバナンス機関の役割	コーポレート・ガバナンス	
	102-27	最高ガバナンス機関の集合的知見	取締役会の実効性評価 社外取締役の独立性に関する考え方	
	102-28	最高ガバナンス機関のパフォーマンスの評価	取締役会の実効性評価	
	102-29	経済、環境、社会へのインパクトの特定とマネジメント	CSR推進体制 マテリアリティの特定プロセス	
	102-30	リスクマネジメント・プロセスの有効性	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 業務執行、監査・監督、指名、報酬決定等の機能に係る事項]	
	102-31	経済、環境、社会項目のビュー	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 業務執行、監査・監督、指名、報酬決定等の機能に係る事項]	

GRIスタンダード		開示事項	公開情報
	102-32	サステナビリティ報告における最高ガバナンス機関の役割	CSR推進体制
	102-33	重大な懸念事項の伝達	企業倫理ホットライン
	102-34	伝達された重大な懸念事項の性質と総数	企業倫理ホットライン
	102-35	報酬方針	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 機関構成・組織運営等に係る事項]
	102-36	報酬の決定プロセス	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 機関構成・組織運営等に係る事項]
	102-37	報酬に関するステークホルダーの関与	コーポレート・ガバナンス [ガバナンス報告書(PDF) > 機関構成・組織運営等に係る事項]
	102-38	年間報酬総額の比率	-
	102-39	年間報酬総額比率の増加率	-
	ステークホルダー・エンゲージメント	102-40	ステークホルダー・グループのリスト
102-41		団体交渉協定	労働者の権利の尊重
102-42		ステークホルダーの特定および選定	-
102-43		ステークホルダー・エンゲージメントへのアプローチ方法	-
102-44		提起された重要な項目および懸念	-
報告実務	102-45	連結財務諸表の対象になっている事業体	有価証券報告書・四半期報告書 [有価証券報告書(PDF) > 関係会社の状況]
	102-46	報告書の内容および項目の該当範囲の確定	CSRコンテンツ編集方針
	102-47	マテリアルな項目のリスト	マテリアリティと対応計画
	102-48	情報の再記述	CSRコンテンツ編集方針 [重大な変更事項]
	102-49	報告における変更	CSRコンテンツ編集方針 [重大な変更事項]
	102-50	報告期間	CSRコンテンツ編集方針 [対象期間]
	102-51	前回発行した報告書の日付	2018年8月
	102-52	報告サイクル	1年（次回2020年8月開示予定）
	102-53	報告書に関する質問の窓口	ジーエス・ユアサ・コーポレーションへのお問い合わせ
	102-54	GRIスタンダードに準拠した報告であることの主張	-
	102-55	GRI内容索引	GRI対照表

GRIスタンダード		開示事項		公開情報
		102-56	外部保証	CO ₂ 排出量と水使用量に関する第三者評価の活用 (外部保証は、レポート全体では未取得ですが、温室効果ガス排出データのみ取得しています)
経済				
201	経済パフォーマンス	103	マネジメント手法	マテリアリティと対応計画
		201-1	創出、分配した直接的経済価値	チャート/エネクター [損益関連、収益指標] 決算短信 [決算短信(PDF) > 損益計算書(売上原価、販管費、営業外費用、特別損失、当期純利益)] 株主還元
		201-2	気候変動による財務上の影響、その他のリスクと機会	-
		201-3	確定給付型年金制度の負担、その他の退職金制度	有価証券報告書・四半期報告書 [有価証券報告書(PDF) > 連結財務諸表等 > 退職給付関係]
		201-4	政府から受けた資金援助	-
202	地域経済での存在感	103	マネジメント手法	-
		202-1	地域最低賃金に対する標準新人給与の比率(男女別)	-
		202-2	地域コミュニティから採用した上級管理職の割合	-
203	間接的な経済的インパクト	103	マネジメント手法	-
		203-1	インフラ投資および支援サービス	環境への貢献 [太陽光発電の安定供給に貢献 / 屋久島環境文化財団の活動の支援]
		203-2	著しい間接的な経済的インパクト	-
204	調達慣行	103	マネジメント手法	-
		204-1	地元サプライヤーへの支出の割合	-
205	腐敗防止	103	マネジメント手法	-
		205-1	腐敗に関するリスク評価を行っている事業所	-
		205-2	腐敗防止の方針や手順に関するコミュニケーションと研修	コンプライアンス意識の浸透 CSR職場ミーティング 企業倫理ホットライン
		205-3	確定した腐敗事例と実施した措置	腐敗事例を含む重大なコンプライアンス違反は発生しておりません。
206	反競争的行為	103	マネジメント手法	-
		206-1	反競争的行為、反トラスト、独占的慣行により受けた法的措置	反競争的行為を含む重大なコンプライアンス違反は発生しておりません。

GR1スタンダード		開示事項		公開情報
環境				
301	原材料	103	マテリアリティ手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 再資源化
		301-1	使用原材料の重量または体積	-
		301-2	使用したリサイクル材料	リサイクルにおけるマテリアリティ [主要材料使用量]
		301-3	再生利用された製品と梱包材	リサイクルにおけるマテリアリティ [再資源化量]
302	エネルギー	103	マテリアリティ手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 環境負荷低減への取り組み > 輸送 環境負荷低減への取り組み > 開発・設計
		302-1	組織内のエネルギー消費量	リサイクルにおけるマテリアリティ [生産におけるエネルギー使用量]
		302-2	組織外のエネルギー消費量	リサイクルにおけるマテリアリティ [物流におけるエネルギー使用量]
		302-3	エネルギー原単位	環境パフォーマンス推移データ
		302-4	エネルギー消費量の削減	環境保全効果 [エネルギー削減量]
		302-5	製品およびサービスのエネルギー必要量の削減	-
303	水	103	マテリアリティ手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 世界各国の生産拠点におけるCO ₂ 排出量と水使用量の削減
		303-1	水源別の取水量	リサイクルにおけるマテリアリティ [水使用量]
		303-2	取水によって著しい影響を受ける水源	-
		303-3	リサイクル・リユースした水	環境保全効果 [再生水使用量]
304	生物多様性	103	マテリアリティ手法	-
		304-1	保護地域および保護地域ではないが生物多様性価値の高い地域、もしくはそれらの隣接地域に所有、賃借、管理している事業サイト	-
		304-2	活動、製品、サービスが生物多様性に与える著しいインパクト	-
		304-3	生息地の保護・復元	-
		304-4	事業の影響を受ける地域に生息するIUCNレッドリストならびに国内保全種リスト対象の生物種	-

GRIスタンダード		開示事項		公開情報
305	大気への排出	103	マネジメント手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 世界各国の生産拠点におけるCO ₂ 排出量と水使用量の削減 化学物質排出量の把握
		305-1	直接的な温室効果ガス (GHG) 排出量 (スコップ 1)	ライフサイクルにおけるマテリアリティ [生産におけるCO ₂ 排出量]
		305-2	間接的な温室効果ガス (GHG) 排出量 (スコップ 2)	ライフサイクルにおけるマテリアリティ [生産におけるCO ₂ 排出量]
		305-3	その他の間接的な温室効果ガス (GHG) 排出量 (スコップ 3)	ライフサイクルにおけるマテリアリティ [物流におけるCO ₂ 排出量]
		305-4	温室効果ガス (GHG) 排出原単位	環境パフォーマンス推移データ
		305-5	温室効果ガス (GHG) 排出量の削減	環境保全効果 [CO ₂ 削減量]
		305-6	オゾン層破壊物質 (ODS) の排出量	ODSの生産、輸入、輸出は実施していないため、本項目に該当しません
		305-7	窒素酸化物 (NOx)、硫黄酸化物 (SOx)、およびその他の重大な大気排出物	化学物質排出量の把握 [PRTR法対象物質の排出移動状況 (大気への排出)]
306	排水および廃棄物	103	マネジメント手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 環境リスクマネジメント
		306-1	排水の水質および排出先	ライフサイクルにおけるマテリアリティ [排水量]
		306-2	種類別および処分方法別の廃棄物	ライフサイクルにおけるマテリアリティ [最終処分量 / 再資源化量] (廃棄物排出量に係る情報は、有害・無害の区別ではなく、種類別・処分別に開示しています)
		306-3	重大な漏出	環境リスクマネジメント
		306-4	有害廃棄物の輸送	バーゼル条約に基づく特定有害廃棄物等の輸出入は実施していません
		306-5	排水や表面流水によって影響を受ける水域	-
307	環境コンプライアンス	103	マネジメント手法	マテリアリティ [環境保護の推進] 環境コンプライアンス管理
		307-1	環境法規制の違反	環境コンプライアンス管理
308	サプライヤーの環境面でのアセスメント	103	マネジメント手法	マテリアリティ [CSR調達の推進] グリーン調達活動
		308-1	環境基準により選定した新規サプライヤー	グリーン調達活動
		308-2	サプライチェーンにおけるマイナスの環境インパクトと実施した措置	-

GR1ターゲット		開示事項		公開情報
社会				
401	雇用	103	マネジメント手法	働きやすい職場環境の提供 適正な労働時間の維持 多様な働き方の尊重
		401-1	従業員の新規雇用と離職	働きやすい職場環境の提供 > 基本的な考え方
		401-2	正社員には支給され、非正規社員には支給されない手当	-
		401-3	育児休暇	仕事と育児・介護の両立支援
402	労使関係	103	マネジメント手法	労働者の権利の尊重
		402-1	事業上の変更に関する最低通知期間	-
403	労働安全衛生	103	マネジメント手法	マテリアリティ [労働環境・労働安全衛生の向上] 安全かつ衛生的な労働環境の維持、向上
		403-1	正式な労使合同安全衛生委員会への労働者代表の参加	トップの強い意思に基づいた安全衛生の推進
		403-2	傷害の種類、業務上傷害・業務上疾病・休業日数・欠勤および業務上の死亡者数	トップの強い意思に基づいた安全衛生の推進
		403-3	疾病の発症率あるいはリスクが高い業務に従事している労働者	マテリアリティ [労働環境・労働安全衛生の向上 > 労働安全衛生リスクマネジメントの推進]
		403-4	労働組合との正式協定に含まれている安全衛生条項	当社の労働組合協定には安全衛生条項が含まれています。
404	研修と教育	103	マネジメント手法	マテリアリティ [人材開発の推進] 中長期的な人材育成と適切な評価
		404-1	従業員一人あたりの年間平均研修時間	自立型人材の育成
		404-2	従業員スキル向上プログラムおよび移行支援プログラム	自立型人材の育成
		404-3	業績とキャリア開発に関して定期的なレビューを受けている従業員の割合	自立型人材の育成
405	ダイバーシティと機会均等	103	マネジメント手法	多様な働き方の尊重
		405-1	ガバナンス機関および従業員のダイバーシティ	障がい者の雇用
		405-2	基本給と報酬総額の男女比	-
406	非差別	103	マネジメント手法	差別の禁止と多様性の尊重
		406-1	差別事例と実施した救済措置	差別事例は発生していません。

GRIスタンダード		開示事項		公開情報
407	結社の自由と団体交渉	103	マネジメント手法	<u>労働者の権利の尊重</u>
		407-1	結社の自由や団体交渉の権利がリスクにさらされる可能性のある事業所およびサプライヤー	-
408	児童労働	103	マネジメント手法	<u>強制労働、児童労働の禁止</u>
		408-1	児童労働事例に関して著しいリスクがある事業所およびサプライヤー	-
409	強制労働	103	マネジメント手法	<u>強制労働、児童労働の禁止</u>
		409-1	強制労働事例に関して著しいリスクがある事業所およびサプライヤー	-
410	保安慣行	103	マネジメント手法	-
		410-1	人権方針や手順について研修を受けた保安要員	-
411	先住民族の権利	103	マネジメント手法	-
		411-1	先住民族の権利を侵害した事例	-
412	人権アセスメント	103	マネジメント手法	<u>マテリアリティ [人格の尊重]</u> <u>CSR職場ミーティング</u>
		412-1	人権レビューやインパクト評価の対象とした事業所	-
		412-2	人権方針や手順に関する従業員研修	<u>人権教育の推進</u>
		412-3	人権条項を含むもしくは人権スクリーニングを受けた重要な投資協定および契約	-
413	地域コミュニティ	103	マネジメント手法	<u>地域社会との共生</u>
		413-1	地域コミュニティとのエンゲージメント、インパクト評価、開発プログラムを実施した事業所	-
		413-2	地域コミュニティに著しいマイナスのインパクト（顕在的、潜在的）を及ぼす事業所	-
414	サプライヤーの社会面でのアセスメント	103	マネジメント手法	<u>マテリアリティ [CSR調達の推進]</u> <u>CSR調達の推進</u>
		414-1	社会的基準により選定した新規サプライヤー	-
		414-2	サプライチェーンにおけるマイナスの社会的インパクトと実施した措置	<u>CSR調達の取り組み</u>

GR1スタンダード		開示事項		公開情報
415	公共政策	103	マネジメント手法	-
		415-1	政治献金	政治献金ロビー活動に対する支出はありません。
416	顧客の安全衛生	103	マネジメント手法	<u>マテリアリティ</u> [高品質な製品の提供] <u>安全性と品質の重視</u>
		416-1	製品およびサービスのカテゴリに対する安全衛生インパクトの評価	-
		416-2	製品およびサービスの安全衛生インパクトに関する違反事例	<u>製品に関する重要なお知らせ</u>
417	マーケティングとラベリング	103	マネジメント手法	-
		417-1	製品およびサービスの情報とラベリングに関する要求事項	<u>製品カタログダウンロード</u> <u>輸出取扱製品</u>
		417-2	製品およびサービスの情報とラベリングに関する違反事例	規制および自主的規範への違反はありません。
		417-3	マーケティング・コミュニケーションに関する違反事例	規制および自主的規範への違反はありません。
418	顧客プライバシー	103	マネジメント手法	<u>マテリアリティ</u> [機密情報管理の徹底] <u>情報セキュリティ</u>
		418-1	顧客プライバシーの侵害および顧客データの紛失に関して具体化した不服申立	顧客のプライバシー侵害や顧客データの紛失に関する不服申立は発生しておりません
419	社会経済面のコンプライアンス	103	マネジメント手法	<u>マテリアリティ</u> [CSR・コンプライアンスの徹底] <u>法令等の遵守</u>
		419-1	社会経済分野の法規制違反	重大な罰金や制裁措置は発生しておりません

CSRコンテンツ編集方針

Editorial Policy

CSRコンテンツ編集方針

本CSRサイトは、当社グループのCSRへの考え方や取り組み状況について報告しています。なお、報告にあたっては、ステークホルダーの皆様からのご意見や当社グループにとっての重要性を考慮した上で、情報開示を行っています。

対象期間

2018年度（2018年4月1日～2019年3月31日）のCSR活動状況を中心に開示しています。なお、当社グループの最新のCSR活動状況を報告するために、2018年度以降の情報についても適宜開示しています。また、一部のパフォーマンスデータなどについては、経年変化を示すために、2018年度以前の情報についても開示しています。

対象組織

G Sユアサグループ（株式会社 ジーエス・ユアサ コーポレーションおよび主要な国内・海外の子会社）を対象組織としています。なお、「当社」と記述している場合は、「株式会社 ジーエス・ユアサ コーポレーション」を表しています。その他、対象組織が異なる場合は当該箇所に適宜明示しています。

情報の正確性

開示情報の正確性を確保するため、当該情報の担当部門や広報部門など、複数の部門で確認を行った上で、情報開示を行っています。

重大な変更事項

対象組織において、従前からの開示情報に重大な変更はありません。また、過去の開示情報において、記載間違いなどによって修正が必要な掲載箇所はありません。

参考ガイドライン

企業のサステナビリティ報告に関する国際的なガイドラインであるGRI（Global Reporting Initiative）スタンダードを参考にしています。

- ▶ [GRI対照表はこちらをご参照ください。](#)

最終更新日

2019年11月1日